

くりさせたいのが勢一杯で、厭でたまらぬ牛乳に少し口をつけるのであつた。それを見た貞さんは天地が覆つたやうに驚いて見せて、

「本統に立子さんは豪い。貞さんはびつくりしてしまつた。あんなに澤山牛乳が減つてゐるのモすもの」と心から感服したやうに言ふのであつた。そんなことを繰り返してゐるうちに盃に二三杯の牛乳を辛うじてこの病弱の子は攝取するのであつた。私等の前に來ると、何を言つてもたゞ小さい聲で無愛想に返辭をする貞さんが、こんな大努力をして立子に牛乳を飲ましてゐるのを見た時、私は覺えず可笑しくなつて笑つた。今迄誰も見て居らぬものと思つてゐたのが、私が見てゐることが解つてから貞さんは前ほどの元氣がなくなつて赤い顔をしながら、牛乳はもとよりのこと、お客様ごつこに飽きが來てむつがりはじめた立子を持って餘しつゝ辛うじてその機嫌をとるのであつた。

「まあこれが一人前に大きくなり得るものだらうか」と思はれた貞さんも、年を重ねるに従つて少しづつ大きくなつて行つた。臺所の方には別に年とつた女中が用を辨じてゐるのであつたが、子供の守りや使ひ歩きは貞さんがした。立子が五つ六つといふ年になつて來た時分には、友次郎が又二つ三つの、守りがなければ濟まぬ年齢になつて來たので、それが又貞さんの重大な役目になつて來た。貞さんは立子を可愛がつたやうに矢張り友次郎をも可愛がつた。立子の幼稚園の送

り迎ひが終りになると今度は友次郎の幼稚園の送り迎ひをするやうになつた。そんな風に私の家には無くてはならぬ重寶な一人となつたのであるが、或時不圖こんな問題が持上つた。それは此頃貞さんが使ひに行く時にお金を落して歸つたり勘定を間違へて歸つたりすることが少くない。もし買ひ食でもしたり、自分で金をこま化したりするやうな悪いことを覺えたのではなからうか、とさういふ疑ひが私等家族の間に起つたのであつた。それは大した金高ではもとよりののであつて、僅に十錢とか五錢とかいふ些細な額ではあつたけれども、さういふ心が起つて來ては困つたものであるといふことを家族のものは囁きあつた。折節國から上京して來た長兄にこれを話したら、長兄は非常に不愉快な顔をして、

「さういふことがあつては困る。お前ところのやうに子供も多いし、人出入りも多いし、それに一々家計簿をつけるでもない家庭では監督が難しい。なまじ國の親許へ連れて歸らうか」と言つた。

「それにも及ぶまい」と言つて私は格別氣にもとめずにあたのであつたが、もと此少女は長兄の周旋で寄越したものであつた爲め、長兄は殊に心配をしていつか次兄に話したものとみえて、當分次兄の方へ引取つてさういふ方面に注意の行き届く嫂の手で監督してみようといふことになつた。

「暫くさうしてみてもどうか」と兄は私に相談をした。それほどにするには及ぶまいと思つたけれど、たいして異存もなかつたので私は其言葉に従つた。

其時の貞さんの様子が強く私の心を刺戟して今も尙ほ忘れることが出来ぬ。長兄がそのことを貞さんに話した時、貞さんは只黙つて聞いてゐたさうである。さうして小さい無愛想な聲で「はい／＼」と返辭をするばかりであつたらしい。長兄は人間の大事として諄々と訓戒を加へ十分貞さんの心に刺戟を與へようと心掛けたらしかつたが、貞さんは何の動かされた様子もなく、私達がどこかへ使ひに行つて來いと言つた時と同じやうな態度で聞いてゐたものらしかつた。それから間もなく一個の風呂敷包を持つて私や妻の前に來て、

「行つて参ります」と言つて頭を下げてそのまゝ水口から出て行つた。それは長兄に連れられて次兄の家へ行つたのであつた。それもどこかへ買ひ物にでも行くのと同じやうな調子であつた。三年も世話になつてゐた家を出るのだといふ様子はどこにも無かつた。私の家を出て兄の家へ行くのが悲しいのだか嬉しいのだか少しも解らなかつた。只長兄の命するまゝに私の家から兄の家へ移るといふこと以外に何の感動もないやうであつた。私はその風呂敷包をかゝへて水口を出て行く後ろ姿を見送つた時に淋しい心持にとざされた。一本の植木を甲の家から乙の家の庭へ移すのにも主人には愛惜はある。三年も私の家に居た少女の上にそれが無い譯はない。況んや少

女の身になつてみたらわれ等よりも更に強い悲喜の念が起るべきであらう。殊に金を落したり、つり錢を間違へたりするやうなことが原因になつて左遷の意味で移されるものとすれば、私等に對して何等の恨か、さうでなければ愧耻を感すべきであらうと思はるゝのに、さういふ點は少しもない。自分の身に覚えのないことを疑はれても、それを言ひ解かうといふ考は起らぬらしい。十三の年に父母の膝下を離れて二百里外の故郷から赤の他人の家へ奉公代りに來たこの少女は、自分の一身は自分の力ではどうすることも出来ないもの、他の人の命令のまゝに動かなければならぬもの、といふやうな考を、格別思慮を費すでもなく、たゞ自然に持つてゐるらしい。さう考へると三四度金を落したり、つり錢を間違へたりしたといふ出來事の爲め、忽ち此少女の上に疑ひの雲をかけたといふ私達の方が罪が深いやうにも考へられて、その私達の上に何の怨憤を抱くでもなく、また何の愛著を残すでもなく、大きな力の支配するまゝに素直に動いて行く此少女を考へた時に、私の心は暫く悲しみにとざされざるを得なかつたのであつた。

貞さんが次兄の家に居たのは二年足らずであつたらうか。その間に金錢上の間違ひはないといふ事が證明され、又嫂の手許で少し裁縫なども覺えたのであつたが、子供が多い故に適當な女中がなくて困るといふ理由のもとに、私達は又次兄の家から貞さんを戻して貰ふことにした。貞さんは前の如く風呂敷包を抱へて別に嬉しさうな顔もせず、又悲しさうな顔もせず水口を潜つて私

の家へ歸つて來た。立子を初め、多くの子供は皆喜んで貞さんを迎へた。貞さんは改まつた言葉は少しもきかずに矢張りもとの通りに子供の相手にもなり、使歩きにも行き、臺所の手傳もした。前と變つてゐるのは、矢張り十人並よりは細い方の身體つきではあるけれども、それでも年相當に發育して容貌も漸く娘らしくなつて來たことであつた。

貞さんの妹の澄さんも十四の年から私の家へ來ることになつた。それ以來は他に女中は置かないで此姉妹二人が臺所の方から子供の相手、使走り、萬端をやつてくれることになつた。澄さんの方は貞さんよりも體格が立派で一寸みると澄さんの方を姉かと思ひ違へる人も少くなかつた。それでも貞さんは萬事姉らしく澄さんに命令をしてゐた。時々澄さんを叱つたりなどもしてゐた。けれども私達の前に出ると貞さんはもとの通り無口であつて、何か言ひつけた場合には只返辭をするばかりであつた。その返辭も小さい聲で聞えぬやうな場合もあつた。

「もつと返辭をはつきりすることを教へなくつちやいかん」と私は妻に小言を言つた。

「いくら言つても直らないのですもの」と妻は言つた。さういふことは何度となくあつた。

友次郎の次にまた宵子といふ子供が生れた。立子の世話をし、友次郎の世話をしたやうに、貞さんは又この宵子の世話もしなければならなかつた。上の子が漸く我儘になつて來るに従つて貞さんの愛は新しく生れた幼いものゝ方に集まるやうに見えた。襦袢すくもの洗濯を初めとして際限もな

く五月蠅い子供の世話を貞さんは少しも厭さうな顔もせずにした。

宵子の生れた年の末に、私の一家は鎌倉に移つた。それは家族のものゝ生活を一變したといつてもよかつた。東京では麴町の高臺たかだいに住まつてゐたのであるけれども、それでも庭らしいものは殆ど無かつた。子供を遊ばすにしても招魂社あたりへ連れて行くのが關の山であつた。招魂社の池の鯉こいに鉄をやることは一番子供を喜ばすことであつたが、又貞さんの一番多く氣を晴らすことでもあつた。朝から來客のある時などは子供を負おつたまゝで埃だらけの往來を使ひ走りするのが貞さんの役目であつた。それが鎌倉へ來てみると、三方には緑を溶かしたやうな山が濁りのない空氣を通して浮み出てゐた。一方には太平洋の濤が直ぐ打ち寄せて來る砂濱があつて、其處は廣々としてゐて、大勢の子供を連れて行つても、何物も自分達を遮りもせねば、又自分達が何物の邪魔になるやうな心持もしなかつた。狭つ苦しい招魂社の池のほとりで、いろ／＼の家の子供や子守に交つて鯉に鉄をやる窮屈さとは大變な相違であつた。砂濱まで出かけないでも買物に行くのにも田圃の中を通つたりして一體に氣がはれ／＼として殊に貞さんなんかの境遇には一大變化が起つた。子供達は上野や淺草に遊びに行けぬのが物足らなかつたけれども、其代り山裾で摘草をしたり、海岸で貝殻を拾つたりして自由に遊ぶことが出來た。

貞さんの趣味が園藝えんぎの方に芽を出して來たのもそれ以來のことであつた。園藝といふと仰山だ

が、東京の家と違つて自然庭が廣いところから、そこには野菜や草花などが作られた。野菜といふのもわざ／＼畑を作つて大根や蕪を育てるのではなくつて百姓から貰つて來た南瓜や胡瓜の苗を植ゑて、その成長を楽しんだり、他所から貰つて來て挿した薔薇が根を下ろして花が咲いたといふやうな極めてやりつ放しなものであつた。それでも貞さんは熱心に世話をした。

或年私が一月餘りの旅行から歸つてみると、井戸端の垣といはず木といはず一面にはびこつてゐるものがあるのを何かと思つてみたら、それは只一株の南瓜の蔓が縦横無盡に蔓を延べてゐるのであつた。たゞ一株でこんなにはびこるものかと驚かれたのであつたが、その緑の葉の重なりかゝるやうに繁茂してゐる中に黄色い花の澤山のぞいてゐるのは見るからに氣持のいいものであつた。

「花は澤山あるけれども一つも實つてゐないぢやないか」と私は其邊を見廻はし乍ら言つた。

「二つばかり大きいのが實つてゐますよ」と妻は答へた。

「どこに」と言ひ乍ら私はそれを探した。成程見ると大きな南瓜が葉がくれに大地の上に腰を据ゑてゐた。

「成程これは大きくなつてゐる」と言つて私は手を觸れて見ようとした。

「そんなことをなすつたら貞さんに叱られますよ」と言つて妻は止めた。向うで干物をしてゐた

貞さんは黙つて顔を赤く染めてゐた。手を觸れると南瓜が腐るといふことは其時私の初めて聞いたことであつた。貞さんは私とその南瓜に手を觸れはしないだらうかと、心の中ではやきもきしながら、口には出し兼ねてゐたものらしかつた。

或人から私は一本の葵の鉢を買つた。東京にゐる時分には斯ういふ贈物を受けると、それを机の上に置いて賞翫してゐる間は極めて短かくつてつい水をやつたり日南に出してやつたりすることを忘れて、忽ち枯らしてしまふのが常であつたが、鎌倉に來てからは私の知らぬ間に斯るもの世話に貞さんの手に移つてゐた。貞さんはそれに水をやつたり、日南日蔭を選んで位置を替へたりすることに決して手ぬかりはなかつた。如何に子供等の世話に忙殺される時であつてもさういふことに骨惜みをしなかつた。二年後に不圖庭の隅に澤山の葵の鉢が並べてあるのを見て、私は言つた。

「こんなに澤山葵の鉢を買つたのかい」

「それは買つたではありません。貞さんが挿木をしてそんなに澤山に殖やしたのです」と妻は答へた。

あの貧弱な一鉢の葵から斯様に澤山の鉢に殖やしたのか。これだけにするには容易なことはなかつたらう。貞さんの熱心と注意がこれだけの鉢數にしたものだと考へると、私は暫く此葵

の鉢から眼を放すことが出来なかつた。

獨り葵の鉢ばかりでなく、貞さんは人から貰つた草花の種は忘れずに蒔いた。それが芽ばえをしてから花をつけるまでの注意は矢張り貞さん一人のつとめであつた。菊の根分なども一人でした。菊には馬糞がいゝといふことを聞いた時に、貞さんは一人で馬糞を拾ひに出掛けた。どこから拾つて来たのか知らないが、それを人から教はつた通りにして肥料にした。隣家にある牡丹が芽を吹き出した時分に、其中の一二本を貰ひ受けて来てそれを庭の一隅に挿したのも貞さんであつた。とてもそんなものはつきつこはないと氣には止めずにゐたが、それがいつまで経つても枯れないのを不思議に思ふやうになつて始めて氣がついて見るとそれは矢張り貞さんのたんせいのもとに首尾よく根を下ろしてゐるのであつた。

獨り草花類ばかりでなく、動物の上にも貞さんの嗜好はあつた。向ひの家の女犬が私の家の床下に子を産んだときに、炭俵を持つて行つてやつたり、石炭箱を持つて行つてやつたりして世話をしたのも貞さんであつた。子供犬が大きくなりかけると大方は私の家で貞さんの賄を受けてゐた。その子供犬のうち男犬は貰ひてがあつて居なくなつてしまつて後へ女犬が一匹残つた。貞さんは此仔犬の減つて行くのを別に淋しがる様子もなかつたが、又面倒が減つたのを喜ぶ様子もなかつた。そして後へ残つた一匹の女犬を前の如く世話をしてゐた。その爲に終に此女犬は私の家

の飼犬も同様になつてしまつて、別に警察に届けて切符をぶら下げはしなかつたけれども、酒屋や牛肉屋の小僧仲間には私の家の犬として取扱はれてゐた。それは餘り大事にもしない私にすら夜遅く歸つて来る時などは遠方にまで迎ひに来て尾を振つて従いて来るほどに馴れてゐたが、貞さんに對する親しさは又格別で、夜暗闇に表を歩いて居ると、いきなり後ろから飛びつくといふ具合で、貞さんの行くところにはどこにでもついて行つた。食事時になると貞さんの足許につきまつはつて離れなかつた。

この女犬が母親になつて新しく子を産んだのはその翌々年のことであつた。貞さんがその仔犬の爲にビール箱や炭俵を運んだのは二年前の時と異らなかつた。親犬が受けたと同じ世話をその仔犬は貞さんから受けるのであつた。けれども其時の仔犬は皆育たずに死んでしまつた。その翌年又同じやうに子を産んだ。その世話も亦貞さんがした。其時は四匹の仔犬であつたが育つたのは二匹であつた。そのうちの二匹の仔犬は酒屋の小僧の世話でどこかに貰はれて行つた。それが中で屈強ないゝ仔犬であつたが、その後貞さんが八幡前を通つた時に、道端に捨てられて彷徨つてゐた仔犬が、どうしても酒屋の小僧が連れて行つた家の犬に相違なかつた。呼んだらば暫く自分の後に跟いて来たが、又引つ返して行つてしまつた。と言つて心残りのやうに話してゐた。残りの一匹は酒屋の小僧の連れて行つたのほど丈夫ではなかつたが、又所望する者があつたので

近所の西洋人の家に呉れてやつた。それは背中に8の字形の黒い斑點があつたので假りに「八」と呼んでゐた。ところが此八は仕合はせもので、西洋人の手許に愛撫されて瞬く間に大きな色のいゝ元氣一杯の犬になつて、毎日のやうに私の家へ遊びに来て母親と一緒にふざけ廻つてゐた。所がこの母親の方は間も無く姿が見えなくなつて了つた。犬殺しに殺されたのであらうと云ふ噂もあつたが鑑札をうけて居なかつたので警察に引張られて行つてお上の手で撲殺されたものであらうと想像された。此方が鑑札をうけなかつたのは悪かつたが、無斷で撲殺するのも慘酷な話だと私達は不平を言つたが、貞さんは何ともいはなかつた。さうして親が居なくなつた後も猶ほ毎日のやうに遊びに来る八を待兼ねて居た。

八の方は贅澤ぜいたくに育つたので味噌汁をかけた飯などは決して食はなかつた。魚の骨ならば時々食つた。けれども肉類でないと満足らしい様子であつた。その爲め家へ来ても満足する様な御馳走には滅多にありつく事が出来ないであつた。それでも必ず毎日の様に遊びに来た。

「自分の生れた家は何時迄も忘れず知つて居るのだよ」と私の家人共は囁ささやき合つた。冬になつて水口の戸が閉つて居る時には、八は後足で坐つて前足を烈しく戸にブツつけるのであつた。その合圖で戸を開けてやると八は臺所の土間に躍り込んで一しきり遊んだ末に歸つて行つた。其戸を開けてやる迄は八は幾度も同じ事を繰返して叩くのであつた。或時など餘り烈しく叩いたので

戸が内側へ外れて了つた。其物音に驚いたのは家人よりも八自身であつた。彼は鷲まつとこ地に尾を垂れて表へ逃げ出して了つた。けれども其翌日來て戸を叩く事は矢張り元の通りであつた。此八も貞さんが表を通つて居る時には暗闇の中を唐突に飛付く事は彼の母親の通りであつた。

三四年前或人が京都から來た時に桂川の河鹿を三匹土産に持つて來て呉れた。此河鹿を世話する事も何時の間にか貞さんの役目になつた。小さい河鹿の鉢では可愛相だと云ふので大きな河鹿の鉢が調へられた。冬になつて柿の枯葉が良いと云ふのでそれを鉢の中に入れて河鹿に冬籠をさす様にした。それから長火鉢の傍に置き天氣の良い日は硝子戸の中の日向に置いた。午後二三時の暖かい盛りになると、冬の最中でも河鹿は低い聲を出して鳴いた。それを鳴かす爲に口笛を吹く事が貞さんは何時の間にか上手になつて居た。子供を遊ばせながら貞さんが口笛を吹くと河鹿は聲に應じて鳴いた。うっかり聞いて居るとそれは貞さんの口笛か河鹿の鳴聲か區別のつかぬ事などもあつた。

「冬鳴く河鹿は良い河鹿なんですよ」と言つて、來る人は皆賞めた。河鹿が全く聲を潜めて鳴かなかつたのは一月許りの嚴寒の間のみであつた。春が催しかけて來ると死んだのでは無いかと危まれて居た河鹿が又小さい聲をして鳴き初めた。貞さんの口笛は絶えず聞えて居た。蠅が出初める様になつて來ると、貞さんは一匹の蠅をも逃がさぬ様に手取りにしてそれを河鹿の家に入れて

やる事が日課となるのであつた。

或日貞さんは今迄三匹居た河鹿が二匹になつて了つた事に不審を抱き始めた。けれどもどう探して見ても一匹不足した。人の話す所に依ると河鹿は極めて小さい穴からでも抜け出す事が出来るもので、大方金網と瀬戸物との間の空虚から逃げ出したものであらうと云ふことであつた。それ以來その空虚は紙で目張りされて了つた。さうして翌年になつて或人が更に桂川から持つて来て呉れた五六匹の河鹿を入れた爲にその河鹿の家は俄かに賑かになつた。日暮になると十匹近い河鹿が金網にへバリついた様にして長い足を伸ばして居るのが目に著いた。貞さんは其中で、此河鹿が一番よく鳴く河鹿で、あの河鹿が一番賑な聲をして鳴く河鹿であると云ふ様な事をよく知つて居た。

或時貞さんは庭で一匹河鹿を見たと言ふ事を話した。さうしてそれは此間鉢から逃げた河鹿に相違ないと言つた。それで皆庭に出てそれらしいものを探したのであつたが見付からなかつた。大方普通の蛙を河鹿に間違へたのだらうと云ふ事で其話は葬られて了つた。

宵子の次に生れた六番目の子を、私は六と名前を付けた。立ち始め東京で生れた子は鎌倉に来てから皆丈夫になつたのであるが、鎌倉で生れた六は生れながらに弱かつた。三つの年に死んだのであるが其迄の世話を貞さんは殆ど親同様にした。三つになつても未だ十分に口のきけな

つた六は、母が来いと言つても貞さんに獅噛み付いて来ない方が多かつた。六が息を引取つた時に貞さんは箒を持つて奥の間を掃除して居つた。私は奥の間に行つて貞さんを見た時に急に胸の痛くなつて来るのを覺えた。それから貞さんに六の死んだ事を言つて聞かした。貞さんは信じない様な顔をして黙つて私の方を見て突立つて居た。私の様子を見た貞さんは箒を持つたまゝ障子に凭れて泣いた。妹の澄さんは臺所に突立つた儘泣いた。此一瞬間私の家族の者は皆同時に聲を潜めて泣いた。

六が死んで間も無く又女の子が生れた。その世話も主として貞さんがした。妻が用事のため東京に行つて泊る事があつても子供は格別淋しがらなかつた。子供は貞さんに抱かれて眠るのであつた。母親が歸つて来ると宵子などは斯んな事を母親の前で言ふのであつた。

「お父さんやお母さんがお留守の時貞さんが威張つて仕様がなによ。宵ちゃんでも小兄さんでも叱りつけるのよ」

さう言つて訴へる様に言ふのであつた。けれども私も母親も笑つてそれを受けなかつた。

「それはお前が貞さんの云ふ事を聞かないからだよ。父さんや母さんの居ない時は貞さんの云ふ事をきかなければ不可ませぬ」

外の子供等も不平があるのかもしれないが、大方黙つてゐた。少しも斟酌なしに貞さんの

前でさう云ふ不平を私等に訴へるのは宵子であつた。

「だつて宵子ちゃんと言ふ事をきかないではありませんか」

若し私等二人が宵子の不平に對して黙つて居る時には、貞さん自身が斯う云ふ風に辯解した。

「嘘だわ。貞さんが威張るのだわ」

さう言つて宵子は中々承知しなかつた。時には立子も友次郎も同じ様な不平な顔付をして、宵子に口を添へる事もあつた。朝、私が臥床の中にある時に、貞さんの子供を叱る大きな聲の聞こえる事もあつた。さう云ふ時は忽ち宵子の肝癪が破裂して帛を裂いた様な鋭い泣き聲が起るのであつた。

「貞さんも逆らはぬ様にすれば宜いではないか」

宵子の我儘は承知して居ながらも、そんな事を言つて貞さんを叱る事などもあつた。縁側に坐つた宵子の髪を結ふ時が一番その破裂の多い時であつた。

「痛い／＼。そんなにしては痛い」と宵子は泣聲を出して叫んだ。

「ちつとして居らつしやいよ。そんなに動いては結へないぢやありませんか」

それは貞さんの聲であつた。立子の髪を結ふ時にも同じ様な争が起こつて居た。

立子、友次郎、宵子、六、それから一番末子の晴子に到る迄、小さい時から一々面倒を見て來

たのであるが、何れも齡を取つて來るとだん／＼我儘も出て來るし、素々同格の家の娘であると云ふ事は云ひ聞かされて居ながらも、女中代りに使つて居るものであると云ふ事を子供心にも承知して幾何か馬鹿にしてかゝるので、貞さんは大きくなつて行く者程その愛の失せて行くのを覺えた。さうして何時迄も發育不完全で赤ん坊の様であつた六を死ぬる迄心から可愛がつた。六が死んだ後は新たに生れた晴子を可愛がつた。六に失つた所の物をこの晴子に取り返すやうな心算で一層可愛がつた。

貞さんが廿歳の年になつたのは、六が生れてから間もない事であつた。もう廿にもなつたら何處かに嫁けてやらねばならぬと云ふ考へは我々の頭に起こつたのであつた。

「貞の一身も澄の一身も萬事お任せするから宜敷頼む」と両親から委任されて居るのではあるがさて斯うなつて見るとどう云ふ風にして良いものか、人を嫁入らしたと云ふ経験のない私どもに取つては中々困難な問題の様に考へられた。

「何處か良い口があつたら周旋を頼みます」

さう人に話したりした。

「ほんとうにね、貞さんも最う何處かに嫁付けにしなければならぬ様になりましたね。早いものですこと」

親戚の老婦人などは驚いた様にさう言つた。實際私達にした所でこの間来たばかりだと思ふのに早や廿にもなつたのかと今更の様に驚かれるのであつた。

「此頃の時勢ときせいの事ですから、二十一二になつた所でさう遅れると云ふ事ありませんから……」
さういふ人もあつた。此頃本統に役に立つ様になつて來たのだから、今一二年は宅に置く事にしようと思へ考へて瞬とく間に一年二年は過ぎて了つたのであつた。

「私は一生お嫁に行かずに此方の家に居ます」

雑談の序に結婚に關する話の出た時には何時も貞さんはこんな事を言ふとの事であつた。

「一たんお嫁に行つてもどうかした不幸な事で貞さんが家へ歸つて來ると云ふ様な事があつた場合にはお前達は皆んなして面倒を見てやらなければならぬ。お前達みんな貞さんの世話になつたのだからそれを忘れては不可ぬ」

斯う云ふ事を私は子供等の集つて居る所で二三度も話した事があつた。年を取つた子供は意味を了解して頷うなづいた。年のいかぬ子供は譯もわからずに頷うなづいた。貞さんは其等の話を洩れ聞いても別に感動した様子もなかつた。この儘で何處にも嫁かずに私の家に居続けると云ふ事は不憫な事だと思つた。乍併何處かに嫁いた後、不幸な目に逢つて自分の體の置き場所が失くなつたと云ふ様な場合には、私どもで世話をしてやらねばならぬと云ふ考へは皆んなにあつた。

一二年と思つて居るのが忽ち二三年になり四五年になつた。六が死んだ時妻は最う妊娠して居たので貞さんの結婚を急ぐ心持になれなかつた。

「自分の方の都合で人の婚期を誤るのは悪い事だ」と承知しながらも、別に他から申込んで來る結婚談も無かつたのでつい其儘になつて居た。八十以上になる國許の年取つた貞さんの父親が是非一度貞さんに逢ひたいと云ふ希望があると云ふことを聞いたので貞さんが二十三歳の年に一度歸省きせうした。僅か十日ばかり居た許りで貞さんは歸つて來た。

或時私は不圖貞さんの顔を見て、娘らしい皮膚の光澤が消えかけて、何處か最う齡取とせつた女らしい様子ようすの見える來たのに愕然として驚いた。

「最うあんなに齡取つたのか」

さう思つて私は貞さんの頬のあたりの小さい皺を見入つた。

「婚期を失はずと云ふ事は私共の大きな責任だ」

さう考へるとヂッドとして居られない様な心持もした。がそれかと言つて適當な結婚の申込口も無く矢張り空しく日を過すより方法はなかつた。

今年の一月に私は國へ歸つた時、最う近い内うちどうしても貞さんは他へ縁えん付けねばならぬと覺悟して、その代りに置く他の一人の少女を探した。丁度その話の定まつた日に、貞さんの母親が來

た。さうして父親が老耄して最う旦夕が計られぬ位になつて居るし是非貞さんに逢ひたいと云ふ希望もあるらしいから此際至急歸して貰ふ事は出来まいかと云ふ相談をするのであつた。

「私の方も無人ですから貞に歸つて貰はねば介抱にも困る様な次第ですから……」

さう云ふ話であつた。長兄はもう亡くなつてゐたので、歸京して後次兄に相談した。

「こちらで結婚させて遣らねばならぬ義務がある様に考へて居たのだが……」と私は云つた。

「それでも両親の方に歸して貰ひたいと言ふ希望があるのなら歸しても良いではないか」と次兄は答へた。長兄が今迄生きて居たら萬事の處分を依頼するのであつたけれども、斯う云ふ事に面倒を見て呉れる長兄が居なくなつた以上は致方がないと考へたので、貧困を極めて居る両親の膝下に歸すと云ふ事が貞さんの爲に利益であるか無いかを考へる暇なしに両親の希望通り歸す事にした。

私は歸つて來てこの事を貞さんに話したとき、貞さんは相變らず感動のない顔をして居た。歸ると決まつたことが嬉しいのだから、嬉しくないのだから、其心持も私には受取れなかつた。然しこの頃の貞さんは假りにお嫁に行くとしても郷里の方へ行きたい、いづれにせよ郷里の方へ歸りたい、東京もいやだ、鎌倉もいやだ、といふことを繰り返して言つてゐたと、さういふことを後になつて聞いた。さうしてみれば父母の膝下に歸ることゝ極まつたことは、固より満足に相違なかつた。

けれどもさう極まつてみると殆ど一間位の狭い家に貧居して居る老父母の許に歸つて、何の面白いことがあらうと想像してみた。私はいづれに向ふも快樂を缺いて居る此娘の身の上を不憫に思はずにゐられなかつた。殊に其日の生活にも困つて居るらしい家に戻つた上は、乏しいながらも私共の手許で拵へてやつた風呂敷包の中のものも、いつか空しくなる時が來ないとはいへないと考へると、一時の希望に任せて歸すといふことが慘酷なことやうにも思はれた。

歸ると極まれば一日も早く歸る方が老いた両親も満足であらうと考へたのであつたが、貞さんは別に急ぐ様子も見えなかつた。一應自分の方から手紙を出して見て、その返事次第で歸る日を極めると言つた。斯くして貞さんは毎日のやうに朝早く起きて立子や宵子の髪を結つて學校に出してやり、家中の拭掃除を済ませてから晴子の子守をした。其間に河鹿の家を日向に出してやつたり、この頃壺の覆ひを除つた金魚をのぞき込んだり、鉢植ゑにしてあるチューリップやヒヤシンスに水をやつたりした。漸く國から返事が來て、來る何日に立出すると極まつてからも、その毎日の日課をやることに何の變りもなかつた。

貞さんの嫁入料にと貯金して置いた金が或る額に達してゐた。これを持たせて歸すことは一時老父母を喜ばすにとどまつて貞さんの爲にはならないと考へた。それは貞さんの結婚期まで私の手許に預かつて置くことにした。それに就いても貞さんは何の感動もない様子であつた。

國へ歸れば又東京へ出て來るといふのは大事業であるから、歸る前に二三日東京へ行つて見物させてはどうか、といふことを私は妻に話した。ところが妻は斯う答へた。

「私もさう思つて此間話したのですが、貞さんは東京には行きたくないさうです。それで何處か見たいところはないかと聞いたら、半僧坊に參詣するのと、逗子と葉山に一度行つて見たいさうです。それも歩いて行つてみたいさうです」

逗子葉山は兎も角も、半僧坊には何故參詣したいのか、私には解らなかつた。

「此邊の人が皆半僧坊々々といふものですから、それで詣つてみたいのでせう」と妻は言つた。

十二年間の長い勤めを了へて、今度違つた境遇に身を置くやうにならうとする場合に、東京に行つて帝制とか淺草とかを見物してみようといふ希望もなく、たゞ半僧坊と逗子葉山とに行つて見ようといふ其望みを淋しく思つた。

「希望通り遣つてやつたらよからう」と私は言つた。

「遣つてやる積りです」と妻は答へた。

いよいよ明日貞さんの出立いふするといふ前日、私は二三泊の積りで東京に出かけねばならなかつた。その日まで貞さんは一向半僧坊にも、逗子葉山にも出かける様子はなかつた。東京に出がけに貞さんは臺所にゐて一向私に挨拶に出て來る模様もなかつた。そこで私は、

「貞さん」と呼んだ。

「はい」と答へて貞さんは出て來た。さうして私の前へ出て來ても黙つて私の顔を見てゐた。私から言ひつけられる用事は何であらうかとそれを待ち設けてゐる様子であつた。固より私が今日東京へ行つたら三四日は歸つて來ないものであることは十分承知してゐるのであつた。

私の方から切り出した。

「いよいよ明日發つさうだね。長々お世話であつた。もし國へ歸つて後困るやうなことがあつたなら、いつでも出ていらつしやう」

私は只それだけのことを言つた。それは外套を著て帽子を被つて玄關に突つ立つての話であつた。貞さんは、はじめて氣が付いたやうに、

「どうも長々お世話さまでございました」と只一言さう言つて辭儀をしたばかりであつた。私はただこれ丈で十二年間世話になつた貞さんに別れることを心残りに思ひながら表に出た。

三四日してから鎌倉に歸つて來て、私は、貞さんが出立する時に名残惜しさうな様子はなかつたかを聞いてみた。

「家うちを出る時は平氣でした。それでも子供達が送つて行つて停車場で別れる時は涙をこぼしたさうですよ」と妻が答へた。

家に著いたら直ぐ電報を打てと言ひつけて置いたのであつたが、電報は來なかつた。家に著いてから二三日目に出した手紙といふのが、こちらから安否を氣づかつて電報で問ひ合はした日に漸く著いた。

408

貞さんの歸郷といふことを考へて見ると、曾て一包の風呂敷包を脇挟んで私の家から次兄の家へ行つた時と同じやうな心持がするのであつた。貞さんが發つたあと暫く、晴子は貞さんのことを思ひ出して口癖のやうにその名を言つてゐた。鉢植ゑのチューリップやヒヤシンスは貞さんが發つた時と同じやうな色をして紫の花を長くつけてゐた。河鹿の鉢は貞さんが置いたところに、其儘置かれてあつた。貞さんは歸つてから如何にして日を暮してゐるのであらうか、老いたる父母が命ずるまゝに働いて毎日の日を暮してゐるのであらうか。

一月も経つてからのことであつた。貞さんから手紙が來て、それには結婚談のことが書いてあつた。老父母が一日も早く結婚することを勧めるから、御異存さへなければ行くことにせうかと思ふ、とさういふ意味のことが書いてあつた。それに對して、私共は固より何の異存もなかつた。さうして、貞さんは如何なる心持で親の膝下を離れて人の家に嫁ぐであらうか。それは矢張り風呂敷包を抱へて私の家から次兄の家に移つた時の心持と少しも變らぬものであらうか。自分の上のある力に支配されて、少しもそれに逆らはずに言ふなりになつて、そこに何の不平も何の怨み

もないのであらうか。

「貞さんが若し不仕合せな眼に遇つて寄る邊がないやうになつたらば、お前達が面倒を見てやらねばならぬ」

私は子供等の前で又繰返して言つた。年をとつた子供は意味を了解して領いた。年を取らない子供は意味を了解せずに唯領いた。

(大正六年)

甲州の男

甲州の山中から伊豆の或る温泉に病氣を癒すつもりで来て居た男がしばらく入湯してゐるうちに旅費がなくなつて歸るにも歸られぬ事になつた。

五十過ぎの男で病氣も一通り癒つて手足が相當に動けるやうになつてからは、勢ひ自分の體を働かして衣食するより外に途はなかつた。軒を列ねてゐる旅宿は各々内湯を持つてゐて、そこには廣い座敷もあり清潔な夜具もあり美しい女もあつて金や暇の澤山ある客を思ふが儘に待遇してくれるのであるが、猶その外に川中や川岸に涌く天然の湯は雨を凌ぎ人目を防ぐだけの設備が出来てゐて、そこには誰でも自由に著物を脱いで湯浴みすることが出来るやうになつて居る。この甲州の男は漸く働けるやうになつた體を働かしながら、僅の賃銀を取つて衣食の資に充て、そのひま／＼にその天然の湯に浸つて猶健康を十二分に恢復しようとするのであつた。

その軒を並べてゐる温泉宿の中に殊に大きな或る一軒の宿は大勢の男や女を使つてゐた。この甲州の男は懶い體を働かせながら考へたのであつた。同じ働くのならあの大きな宿で使つて貰ひ

たい。さう考へた處からその宿に出入してゐる或る植木屋に口入れを頼んで、其浴室の建て増しの人夫に使つて貰ふことになつた。その給金は今迄の所よりも少しよかつた。それを少し前借りしたので男は一枚の單衣を古著屋で買つた。

「内儀さん、こんな著物を買つた。見てお呉んなさい」

さう云つて庭に立つて縁端に出て居た主婦に自分の著てゐる著物の兩袖を突張つて見せた。この温泉宿の凡ての經營、たとへば客の待遇から雇人の使用、同業仲間の交際等すべてさういふ事を身一つに引き受けて苦勞し來つた四十餘りの主婦は興のない顔でその男の方を振り返つて見たが、その男の愚かな顔を見て居るうちに今まで心をとられてゐた考へ事から漸く遠ざかつて、その目の前に突立つてゐる男の上に多少の興味をそゝられた。

「いゝ著物を買つたねえ。高かつたらう」と主婦は物慣れた調子でその愚かな男の心を撫で柔らげるやうに云つた。

「三圓で買ひました」と男は答へてにこ／＼しながら猶その擴げてゐる兩方の袖を首を傾げながら自分で見てゐた。

その事から暫くの間その男の事は餘り主婦の頭にもなかつた。

何十とある客室の客は入り代り立ち代り替つて行つた。或る時三人連の男客が来て或る座敷に

泊つた。一晚滞在して翌日一人の客が先づ歸る時になつて、其の客の財布が見えないといつて騒ぎ出した。其財布の紛失した時間は限られた短い時間であつて、場所もまた限られた短い場所であつた。表で買物をして紙幣入を廻しのポケットに収めた積りでゐたのが外に落ちたのではなかつたらうかと云ふ想像が中で有力な物であつた。主婦も係の女中の三四人も皆不審な顔をして部屋中を探し廻つたが、素より何處にも見當らなかつた。

「室内でなくなる譯は無いよ。君等が湯に行つてゐる間も僕は獨り湯に入らずに此座敷に残つてゐたのだから。その間にこの座敷で財布が紛失するなどといふ事件が起る譯がない。どうしても君が買物をして家に歸る途途中で落したのに相違ない」と一人の先輩の友人は、多少そよつかしい處のある其財布を落した男の顔を熱心に見守つて云つた。

「多分自分が落したのでせう。警察に届けるだけ届けて置いて下すつてもいいよ」

さう云つて其男は待つてゐる車に乗つて停車場の方へ向つた。後に残つた二人の友人と主婦や番頭は今一度繰り返して搜索した。さうして番頭は駐在所に出頭して遺失届をしたが、まだ拾つたといふ届けは何處からも出てゐないといふ事であつた。

話は再びかの甲州から出て來た男の上に戻るのである。彼の古著屋で買つた著物もだん／＼著汚して、その著物の上に繩のやうな小さい兵兒帯を締めて、仕事のない時はその邊をぶらついて

ゐた。主婦の目にはたゞ働人として映つるばかりで、特にその「甲州の男」の存在を認める道はなかつた。獨り主婦の目にはばかりでなく、臺所に入出入する多くの男女の使用人の目にも唯働人の一人として映るばかりであつた。處が其から一月ばかり経つた或る夜の事であつた、甲州の男は臺所に働いて居る一人の年とつた女の名を呼びかけて、斯ういふことを云つた。

「氣の毒だが一圓二十錢するいゝ酒を二升買つて来てくれないか」

女は臺所で働くひまに他の雇人の使ひ歩きなどすることは普通であつたので、酒買ひを頼まれたことは驚きもしなかつたが、唯驚いたのは一圓二十錢の上等の酒を買へといふ事であつた。

「お前、一圓二十錢の酒なんてそんな上等は勿體ないぢやないか。五六十錢處にしてお置きよ」

「いゝよ。わしも給料を溜めて少しばかり金が出来たのだから、今日は一つ上等の酒を飲んで見るだよ」

さう云つて五圓紙幣を女に渡した。女はその男の手から渡された五圓紙幣を不思議さうに眺めながら立つて出かけようとしたのを、男は後ろから呼びとめた。

「もう一升餘計に買つて來てお呉れ。それから其残りで肴を買つて來てお呉れ」

「肴は無駄だよ、お前、おかみさんにあらでも貰つて煮てあげるからそれで我慢おしよ」

さう云ひながら女は出て行つた。その夜は裏の木部屋に筵が敷かれて、そこに毛脛を出した多

くの男が車座になつて飲んだり唄つたりした。今まで唯の働人であつた甲州の男が恰も一座の王様の如く皆からちやほや云はれた。總ての男の手からさす盃が此甲州の男の前に集まつた。男も本當に自分が豪くなつたやうな心持がして平常餘り澤山飲まぬ酒を度を過して飲んで酔ひ潰れてしまつた。

翌日臺所でも庭でも此甲州の男が話題になつてゐた。それを聞いた主婦は眉を擡めた。彼の一月ばかり前に客のなくした紙入のことが頭に浮んで來た。主婦は早速多年出入して居る年とつた植木屋を呼びつけた。その植木屋も昨晚木部屋で酒を飲んだ一人であるといふことを聞いたからで、斯ういふ事に物慣れてゐる主婦は、總ての責任を植木屋一人におつ被せるやうな口吻で話した。

「お前達昨夜木部屋で酒を飲んださうだが、どうしたお金で飲んだのか。大概あたしの方には見當がついてゐるんだが、何かお前達悪い事をした覚えはないかい。もう警察の方にもちやんと届けがしてあることだからお前達そのまゝちつとしてゐる譯には行かまい。あたしにも考があるからはずきりこゝで言つておしまひなね」

この主婦の言葉を植木屋は目を圓くして聞いてゐたが、

「わしも御馳走になつた一人ではありませんが、わしは別に悪い事をした覚えはない。少し心當り

もあるから一寸待つてゐておくんさい」と言つた。

さう言つて植木屋は大急ぎで裏の方へ行つたが、十分も経つたと思ふ頃又やつて來て聲をひそめてかう云つた。

「わしが云つたと云つてくれば困るが、あの御馳走は甲州の男がしてくれたのです。わしと二人で溝浚ひをして居る時革の財布を溝の中から拾ひ出したので、お前財布が無いから困る／＼と云つてゐたぢやないか、それを使つたらいゝぢやないか、とわしがさう云つたら、それぢやさうしべえといつて、あの男が其財布を持つて行つたのですが、何でも其中に少し金が入つてゐたものらしいです。わしも御馳走になつたのは悪かつたが、どうせ拾つた金ではあるし御馳走をしよと云ふのなら飲んでもよからうと思つたのだが……わしも御馳走になつて酒を飲んだのは悪かつたが……」

そんな事を繰り返して云ひながら植木屋は頻りに頭を下げて歸つて行つた。

甲州の男はこの植木屋が主婦の許に呼ばれてから間もなく姿を消してしまつた。何處に行つたのか一二日所在が不明であつた。

「若し山へ行つて首でも縊りはしないだらうか」などといふ噂が臺所の隅の方で聞こえてゐた。主婦も密かに心を痛めて植木屋始めに其ありかを探させた。植木屋の話す處によると、何でも或

家に二日ばかり隠れてゐて誰にも相談もせず愚かな頭で獨り思案に暮れてゐたが、どうしてもこれは主婦に詫びをしてもう一度其宿に使つて貰ふよりほか道がないと覺悟をして、植木屋が行つたのを幸にその取りなしを植木屋に頼んだといふ事であつた。

聽て主婦の前に現はれた彼は例の三圓の著物を著てゐる上に、てか／＼光る新しい一本の帯を締めてゐた。彼が主婦の前で白状したところによると、斯ういふ経緯であつた。

「植木屋と一所に溝を浚へてゐると一つの革の財布が出て來た。植木屋がお前財布がほしいといつてゐるからそれを洗つて使つたらいいぢやないかと云つたので、自分も其氣になつてその財布を水で洗つて竈場の煙突の側へ持つて行つて乾かして置いた。暫く表で働いてから歸つて來て見ると、財布は乾き過ぎて少し焦げて燻ぶつてゐた。其時取り上げてみると今迄氣のつかなくつた横の方に口があつて、其處に五十圓餘りの紙幣の入つてゐるのに氣がついた。そこでかね／＼買ひたい／＼と思つてゐて買へなかつた帯を二本買つた。その一本は以前著物を買つた古著屋がこれは安いから是非買つて置けと云つた五圓の帯を買ひ、今一本は呉服屋で新しい帯をこれも五圓で買ひ、それで十圓使つた上に、其残りの三十圓餘りの金は朋輩を寄席に連れて行つたり飲み喰ひに連れて行つたりして使つてしまつた。今財布の中に十二三圓の現金が残つてゐる。自分もと病氣の療治をする爲に此方に來たので今でも國の方では矢張り病氣が悪いものと思つてゐる

が、若し病氣が癒つたものとなると老母が一人と子供が二人親類に預けてある、その食ひ扶持を此方から送つて遣らねばならぬ事になる。若しこの事が國の方へでもわかるやうになると、年とつた母の心配は固より、親類ではもう老母や子供は見ないと云ふであらうし、かた／＼困つてしまふから、どうか出来る事ならば此事は内所にして貰ひたい、若しおかみさんが使つて遣らうと云ふ氣があるなら自分はこれからどんな事でもして働く氣だ」

かう云ふ意味の話を廻りくどくするのであつた。其中には随分蟲のいゝ勝手な云ひ分もあると主婦には受取れた。殊に主婦が、

「お前、著物も碌にないのに帯を二本も買つてどうするつもりなのだ。その古著屋で買つたといふ帯の方だけでも少しの値引きで買ひ戻して貰つたらいいではないか」と云つた時に彼は、

「それでも此帯は安いから買つたので、今これを値引きして買ひ戻して貰つたら損をして馬鹿馬鹿しい」と云つてどうしても承知しなかつた。主婦はその身勝手な愚かな男を心から憎む事が出來なかつた。

「お前の知つてゐる通りうちには澤山男があるから、別にお前がゐなければ困ると云ふ譯でもないが、そんなにお前が使つて呉れと云ふならば續いて使つて遣つてもいい。その代りこれから斯うおし。四圓給料をあげるその内でお前の小遣だけを引いて残りをあたしが預つて積んで置いて

あけるから、一二年間辛抱して其お前の使つた金を償ひなさい。それをきつとするならば別に身許引受人といふものがあるお前ではないけれども、あたしも信用して使つてあげる……」
そこまで主婦が話して来た時に、男はぼろ／＼と涙を膝の上にこぼし始めた。

一番初めの月は四圓の給料を全部いらないと云つた。が次の月には一圓だけ小遣がいと云つて三圓だけ主婦の手許に預けた。その次の月は更に一圓ではどうも足りないといふので二圓だけ小遣を要求した。それから後は毎月二圓で小遣を濟ませて、二圓だけは主婦に預ける事を續けた。或時彼は主婦にこんな事を訴へた。

「自分は以前少しづつ小遣を溜めて竹の筒に入れて庭の隅に埋めて置いたが、二日ばかり表に出た時に歸つてみると留守の間に誰かが盗つたものと見えて、十圓餘りあつた筈の金が一文もなくなくなつてしまつてゐた」とそんなことを不平さうに話した。さうして、

「馬鹿を見ただ」と舌打ちをした。それからまた或時主婦の前にこんな不平を訴へて来た。客室を掃除する時に溜る紙屑の代は雇人一同の収入になる筈なのであるが、或る一人の男が勝手にそれを賣つてその金を獨りでせしめたといふので、

「わしもうあんな男と一所に働くのは厭だ」
そんな不平を云つたりした。

「そんな小さい事を気にするものではないよ。あの男にはあたしがよく云つて聞かせて遣るからお前はそんな事を気にするより自分の仕事の方に精出したらいゝではないか」

主婦がさう慰めるやうに云ふと、

「さうだつぺいか」と彼はまた素直に引き退つて自分の仕事に出て行くのであつた。彼にあてがはれた仕事といふのは、この宿で持つてゐる田地を耕すことであつた。朝起きると印半纏を着て草鞋を穿いて鋤を擔いで畑に出かけ夕方になると歸つて来た。それは毎日、缺かさぬ日課にしてゐる。二圓の小遣の主なもの煙草代で、彼は畑で仕事に疲れた時には悠々と煙草の煙を大空高く兩方の鼻の孔から立たせてゐる。その外に格別の楽しみといふものは何もなささうである。さうして時々月々二圓づゝの金を溜めて行くと、彼の使つた金が何時になつたらば全部返せるであらうかと云ふ事を考へることもあるが、彼の氣になるのはそんな事よりも却つて彼の紙屑代を一人で占領する男の事であつた。どうも其男の事が癪に障つて仕方がなかつた。

主婦が皆に給料を渡す時に、甲州の男から二圓を差し引いて積み立てゝ行く金がだん／＼殖えて行つた。十二圓の残金の上に月々の積み立てで、もうかれこれ三十圓近くなつてゐた。かの二本の帯のうちの一本を賣り戻したならば、二月位早く皆濟する事が出来る筈だのにと主婦は時々考へるのであるが、彼は今でも決してそれを賣り戻さうとはしない。仕事のひまには時々彼の

かく光る方の五圓の帯を締めて其邊を歩いてゐるのを見受ける事がある。

(大正七年七月)

女

もうかなり月日が経つて記憶も臆になりかけて居るのであるが、それでも忘れかねる事の一つを書く。

鏡山に登つて濱田の夕暮の町を見下ろしてゐる時にぽつ／＼降り出した。其雨の音が夜中の枕にも響いた。

翌朝此雨で乗合自動車が出るかどうかと疑問であつた。津和野迄は峠を二つも三つも越えろといふのに。

愈々出るといふことが明かになつた時、私共は大きな油紙を一枚宛買つて、途中歩かねばならぬ時はそれを合羽の代用にする積りで自動車に乗つた。

青楓君が左の端、私が真中、一二君が右の端といふ風に私等は中央の腰掛けに一列に乗つた。腰掛けは三人並びで三列になつてゐた、前列も後列もまだ空虚であつた。

自動車はなかく出なかつたが、出る間際になつてどか／＼と一群の人が乗り込んで來た。

雨はどしやぶりに降つてゐるので、それ等の人はさしかけて貰つてゐる宿屋のものゝ傘から自動車に乗り込む迄に大方濡れてゐた。

私達の後ろの腰掛には女が三人乗つた。前の腰掛には一人の肥満した男と子供上りの二人の男とが乗つた。さうして澤山の荷物が運び入れられた。

「其風呂敷包はこゝへお貸し」と丁度私の後ろにゐる女が鋭い聲で言つた。何でも大きな風呂敷包が幾つも女の膝の上や足の下に入れられたやうであつた。

前列の男連中は頭よりも高く聳えてゐる荷物を股に挿んだり、膝の上に積重ねたりした。子供上りの二人は荷物に壓されて呼吸も出来なさうに見えた。

肥満した男は口ぎたなく其二人の若者を罵つてゐた。

「そんな持ちやうをしてはいかん。それで倒れたらどうする」などゝ嘯みつくやうに叱つた。其荷物を抱へてゐる若者は、更に自分の體を推し曲げて其荷物を抱へ直した。

「行李や鞆は皆載つたかね。大丈夫かね」と私の後ろの女は又甲高く叫んだ。

「載つたよ」と肥満した男は乙な聲で簡単に答へた。

是等の一行はたしかに旅藝人と受取れた。或は活動寫眞でも興行して廻るものではないかと想像された。

雨の音が一段強く響いた。其中を自動車は漸く動き出した。左右の窓から激しく雨がしぶき込むので、窓掛けが掛けられ、外面はちつとも見えなかつた。

鬱陶しくて呼吸が詰まるやうな心持がした。

自動車は亂暴に駆けつた。

窓掛の透間から時々ちらと見えるところは山腹と谷川とであつた。

其時私達の後ろにゐる女連中は苦しうにうめき出した。それは其うちの二人が嘔吐を催しかけたのであつた。

激しい動揺と呼吸の詰まるやうな陰鬱さで自動車に酔うたものと想像された。

右側の端にゐる女は窓から外に度々嘔いたやうであつた。

私の後ろにゐる眞中の女はハンケチか何かに嘔いてゐるらしく思はれた。

「馬鹿、そんな恰好をしてゐたら酔ふとあれ程言つといたちやないか」と肥満した男は叱るやうに言つた。それは右側の女が窓から外に嘔いた時であつた。

私は是等の女と其男との關係を考へた。

左側の女は静まり返つてゐた。此女は他の二人の女のやうに苦しむ容子も見えなかつたが、又それ等の女を介抱する容子も無かつた。はじめ二言三言話した外はまるで無關係の人のやうに取

りすましてゐた。二人の女も各々自分で苦しんでゐるだけで、互に他を慰める容子も無かつた。自動車は一つの峠を越えて平地へ出たと思はれた。速力は一層加はつた。

其時であつた、自動車がちよつと何かに障つたかと思ふと一つの物音の聞えたのは。それは大きな物音ではなかつた。何か其邊に轉がつてゐた物を自動車がはね飛ばしでもしたのであらうと思はれた。

「鞆が落ちたのだ。鞆が落ちたのだ」と私の後ろの女が突然叫んだ。

自動車は頓著なく進んだ。

「鞆が落ちたのだ。鞆が落ちたのだ」と女は再び叫んだ。それは前よりも迫つた調子であつた。女は立上つてゐるかと思像された。

「鞆が落ちたのではない」と男は言つた。私も鞆が落ちた音とは受取れないと思つた。

「いゝえ鞆が落ちたのだ。見て下さい、鞆が落ちたのに違ひない」と女は叫び続けた。自動車の酔も忘れてしまつてゐる容子であつた。他の二人の女は黙つてゐた。

女の聲が漸く耳に這入つて運轉手は自動車を止めた。車掌は車から降りた。

「鞆は何個だつたのだい。三個かい。三個ならちやんとあるよ。鞆三個に行李二個だね」と車掌

は雨の中に立つて不機嫌さうに言つた。車の後部に荷物を積む場處がくつゝいてゐて、其處にそれ等の荷物が積込まれてゐるらしかつた。

「だから鞆ではないと言つたのだ」と肥満した男は囁くやうに言つた。

ふくれ面をしてゐる車掌は濡れた帽子を被り直して運轉手と並んで腰を掛けた。

自動車は又早い速力で駆けつた。

彼の女は黙つてゐた。何とも言はなかつた。再びハンケチに口にたまる唾液を吐き出してゐるらしかつた。激しく前に屈む時には其の髪が私の背中に障るやうに覺えた。

私の忘れることの出来ないといふのは唯これだけの事である。私はふり返つてそれ等の女を見もしなかつた。又窮屈に詰まつてゐる體をふりむけることも容易ではなかつた。

自動車が三つの大きな峠を無事に越えて、——前日淺利から濱田に來る途中の山路では再三バシクした、そんなことは一度も無しに——津和野の町に著いたのは午を過ぎてゐた。

雨は相變らず盛に降つてゐた。私等が自動車から降りた時には、そこに乗合馬車や荷馬車や人力車が泥海のやうな往來にうごめいてゐた。私等は其處に降り立つて、これから更に一つの峠を馬車で越えようか人力車で越えようかを考へねばならなかつた。

さういふ差迫つた問題を持ち乍ら大雨の中に突立つた私は、同じく自動車から降り立つた彼等

一行を見ようともしなかつた。私の氣のついた時には彼の肥満した男が一人で荷物を周旋してゐるだけで、女達の姿はもう見えなかつた。

(大正九年四月)

濃霧

船の速力が馬鹿に遅くなつてゐるのに氣がついた。さうして汽笛の音が度々聞えた。大方の人は眠つてゐないやうだ。そこゝで話が聞える。

「はつきり目が覺めた時には船體を少し揺がすやうにして響いてゐた機關の響は全く止んでしまつてゐた。船體自身は氣味が悪いやうに静かであつた。たゞ其静かさを破るものは汽笛の絶間ない音ばかりであつた。

「濃霧だ〜」といふ聲がどこからともなく聞えた。

此頃は濃霧が多くつて困るといふことは尾道から高濱に渡る時の船の中でも聞いた。此紅丸も濃霧の爲め出帆を一日遅らしたのだといふことを、先刻此船に乗つた時に事務長から聞いた。

高濱の棧橋を離れる時のいゝ月を其まゝ眼の中に描くことが出来た。餘りの月のうるはしさが却つて氣味の悪い程であつた。

「果たして濃霧であらうか」

私は立子や友次郎の眼を覺さぬやうに起き上つて甲板に出て見た。

まことにそれは濃霧であつた。船員の最もなやまされるものは濃霧だ、といふことはよく話に聞いてゐたが、實際見るのは始めてであつた。目の前は唯霧の世界であつた。試に舷から下を覗いて見ると、船に灯つてゐる電燈の光で直下の波はサラ／＼と光つて見えるが、二三尺離れた波はもう見えなかつた。甲板を此方に歩いて來る船員の姿もはつきりと認められるのは一間許りの近さに來た時であつた。

「いつ迄斯んな風に泊つてゐるのでせう」と私は聞いた。

「判りませんねえ。霧が晴れる迄は」と船員は答へた。其姿はもう霧の中に見えなくなつた。

だん／＼澤山の船客が甲板を歩いてゐることが判つた。皆不安の餘りに濃霧と睨めつくらしをしてゐるのである。

其間にも汽笛は絶えず鳴つてゐた。船首に釣つてある鉦ものべつに鳴らされてゐた。いつ外の船が來てぶつゝかかるか判らぬと考へると心細かつた。

船を揺がすやうな活氣のある響が珍らしく聞えた。絶えず鳴らされてゐる汽笛の音も鉦の響も誠に氣味の悪い陰氣な、死の世界の物音のやうに聞えるのであつたが、其響は珍らしく活氣のある響であつた。

「錨を下ろしたのだな」と私が考へた時に、私の傍に突立つてゐた他の船客も同じことを獨り言のやうに言つた。愈々腰を据ゑて此處に碇泊するのだといふことが判つた。

時計はまだ十二時を多く過ぎてゐなかつた。高濱を出たのが九時過ぎであつたから僅に三時間ほか經つてゐなかつた。凡そ來島海峡くまがさの近傍かと推斷された。左舷に當つて其濃霧の中に一つの灯を認めた。燈臺であらうかと思つて船員に聞いて見た。

「船でせう」と船員は答へた。其灯が此處からどれ程の距離にあるものか想像がつかなかつた。大變遠い灯のやうに思はれるのであるが、さう遠い灯が見える筈もなかつた。さうして其灯はだん／＼こちらに近づきつゝあるのではないかと疑はれた。若し其まゝで進んで來たら此船にぶつかりさうに思はれた。

「船員はあの進み來る灯に氣がついてゐるのであらうか」などゝ危ぶんで見たりした。すぐそれが愚かなる考であることに氣がついた。

甲板の上を歩いてゐると其處の鐵の手すりに靠れた三人の船員が争つてゐた。何事かと思つて立どまつて聞いて見ると、それは先刻錨を下ろした時の事が問題になつてゐるらしかつた。船のテクニクは私に判らなかつたが、此船員三人の間には解釋が違つて互に取つて下らぬことだけは明かであつた。其錨の下しやうがも少しまづ行はれたならば何か大事を惹起したかも知れな

いといふ風にも受取れた。濃霧を前に控へて船員の争つてゐるといふことも心持のいゝことではなかつた。

ゆる／＼と私の傍を通過する一人の老人の太つた姿——それは僧侶であらうかと思はれるやうな恰好で太つた丸い頭の毛も短く刈込まれてあつた——が目に映つた。私は昨夜のあの傍若無人の人々の光景がまざ／＼と思ひ出された。

私は此船の事務長とは豫て親しくしてゐるので、前日松山から別府碇泊中の紅丸宛にベッド三個を注文してやつて置いた。紅丸が高濱に著いた時に聞いて見ると、一等室は私の電報を受取る前に既に満員になつてゐたので、二等室の一隅をゆつくりと私等三人の爲にあげて置いてくれたといふことであつた。

私達が二等室に這入つた時にすぐ私達の眼に苦々しく映つた一團があつた。それは私達と大分距離のある反對の一隅に陣取つてゐるのであるが、それでも破裂したやうに笑ふ其等男女の叫び聲が手に取るやうに耳許に響いた。

廣い二等室に横はつてゐる多くの船客はいづれも其傍若無人の一團體になやまされてゐた。婦人や老人は眠らうとしても眠れぬ容子であつた。婦人や老人ばかりでなく何人も本當に眠りに入ることは出来さうになかつた。

彼等男女の一團はやけに酒をあほつてゐるのであつた。非常に下卑た聞くに堪へぬことを言ひ合はしては皆手を拍つて笑ふのであつた。中にも女の——聲から想像すると太り肉の五十許りの女でもあらうか——だらしの無い下等な笑ひ聲が最も癪に障つた。少し静まると思ふと此女が音頭を取つて、

「一、二、三、ウアッハ、ハ、ハ、ハ」と皆が聲を揃へて笑ふのである。他の客がにが／＼しさうな眼をして其方を見るのに逢著すると、

「なあ、旅の耻はかきずてや。陽氣にするのが薬や。船の中はなあ陰氣臭うては辛抱出来やん」といふやうなことを言つて其にが／＼しさうな眼にすぐ反噓してかゝる。それから外のものをけしかけて又、

「一、二、三、ウアッハ、ハ、ハ、ハ」と喊聲を擧げるのである。

「誰か一人飛出してあの姿を殴つてやればいゝ」といふ考は誰の腹の底にもあるのであらうが、それかと言つて飛出す勇氣のあるものも無く、皆眠れぬ眼を無理につぶつて辛抱してゐたのである。

彼等はボーイになほ酒を注文してゐた。若い女は口三味線で何か唄をうたつたりした。それに合はせて調子の違つた聲で一人の男もうたつた。

「さあ今度はあなたの番や」と其若い女は次の男に催促した。其男は出そびれて困つてゐたらしかつたが、女どもに責め立てられてよろ／＼した聲で俗語をうたつた。

「よう／＼、うまい／＼」と女どもは手を拍つてはやし立てた。すると其男は急に得意になつて稍々大きな聲をして又前の俗語をうたつた。流石に女どもも興を覺まして今度は喝采をしなかつた。座が少ししらけると、彼の五十婆が、

「一、二、三、ウアッハ、ハ、ハ」と又首頭を取つて、一同が馬鹿聲をあげて笑ふのであつた。そんな事が暫く続いた。彼等も流石に草臥れたと見えて、

「眠くなつた。寝まほか」と言ひ出す者があつた。さうしてぼつ／＼自分の座席に戻つて眠るものもあつた。——此時はじめて、是等の一團體は初めからの連れでなくつて、船中で心易くなつたのが彼の婆と若い女との一行に牽附けられてそれを取り圍んで騒いでゐるものであつたことが判つた。

大分静まつたので、他の乗客は漸く眠りに入ることが出来るのを喜んだ。私の傍の一老人などは、

「やれ／＼」と言つて足を踏み延ばして、これから愈々眠りに入ることを用意した。けれども残黨はなほ其まゝ靜まることを肯じなかつた。

「寂しうなつた。もつと騒ぎなはれ」と彼の婆は嗷鳴つた。

「皆が眠れんで迷惑してゐやはる」と若い女は皮肉らしく言つた。

「それは迷惑する人が悪いのや。そんな人は船なんかに乗らんがえ。船に乗つたら最後、騒いで／＼騒ぎぬくのや」と一人の男は一同に當てこするやうに争氣を含んだ聲で言つた。

憤懣の情は他の客のどの頭にも起つたに相違無い。一時室内の空氣が不思議に重くなつて靜まり返つたやうに覺えた。其時であつた。何か低い聲が二三言聞えると思ふうちに、彼の若い女の聲がこんなことを言つた。

「おつさん、あんたも何か一つおやりんか」

極めて低い弱い、土地の底から生れ出たかと思ふ聲が斯ういふ答をした。

「私もな、昔は随分やつたもんや。やれとお言ならやらんことも無いが……」

其あとは聞えなかつた。

「此おつさん怒つてゐやはるのや」と若い女の聲が嘲弄するやうに言つた。

「怒つてどないしようといふのや」と争氣のある若い男の聲が苦々しさうに破裂した。其あとは前のやうな重苦しい靜かさに戻つた。

私は此の地の底から生れたやうな低い聲を痛快に思つて其方を見た。それは聲とは釣り合はぬ

でつぶり太つた坊主頭の老人で、今迄横になつてゐたのが、チャンと坐つて、堂々と彼等に對陣してゐるらしかつた。

若い女や若い男や五十婆は強ひて景氣をつけて又聲を合はせて笑つたりしたが、其後は少しも氣勢があらなかつた。

「おつさんもお休みやす。私達も寝ますわ」と若い女ははしやいだ聲で言つた。

「私はさう容易には眠れん」と低い聲は落著いて答へた。

私は此の低い聲に——それでゐて威力のある——敬意を表していゝ心持でゐるうちに眠りに墮ちたのであつた。

今甲板に立つてゐる私の傍を靜かに通つた坊主頭の老人は正しく彼の低い聲の持主に相違なかつた。彼は靜かな足どりで濃霧の中を心細さうにうろついてゐた。

彼の若い女も五十婆も若い男もやはりぞろ／＼と此甲板を歩いてゐる不安らしい人々の仲間であつた。

一度船室に歸つて又甲板に出た時に驚いたのは一隻の大きな船がすぐ我船の近くに横はつてゐることであつた。

「霧が少し薄くなつたやうだ」と私は頼もしく思つて目を睜つて見た。

(大正九年五月)

山 家

山の這入口から常に私達に離れなかつた川は、此處で音を立て、瀧のやうに落ちてゐた。大きな藤の花が笠のやうに其落下する水の上を蔽つてゐた。路は急な登りになつた。

此の村を離れてしまふと杉や檜の茂つてゐる山などを送迎した。

それを通過すると又村に出た。前の村程の人家は無かつた。川幅は狭くなつてゐた。

家は一方に固まつてゐて、石崖を築いた上に家があるかと思ふと、又其上に石崖を築いて家があつた。

其高みに在る一つの家が私達の志す家であつた。

私達は其處まで登つて行つた。

其家には唯一人の女がゐた。三十前後の女で、髪は無造作に束ね、木綿の袖無しを著てゐた。我等を見てサツと顔を染めたが態度は落著いてゐた。三枚の薄い座蒲團を敷いて私達に是非一

寸でも上れと言つた。私達は上らずに縁に腰を掛けた。

町に炭を運び出す男に言傳をして置いたのが通じてゐなかつた。此處の老人に山を案内してもらふつもりであつたのが、其老人は他の山に出掛けて居た。山といふのは兄の遺産で私ははじめて其山を見に行くのである。

「病氣で永く休んでゐましたのが、今日始めて山へ出掛けました」と其女は言つた。

さう話す間にも女は煙管で煙草をのんでは音高くそれを灰吹きにはたいた。

「さあどちらの山へ行きましたか、黙つて出掛けましたので判りませんが、大凡心當りの山へ使を出して見ませう」と女は又はつきりした調子で言つた。

白粉も紅粉もつけてゐなかつたがどこやら垢ぬけがしてゐた。

私達は老人の案内を待たずに山に行かねばならなかつた。

それからは路らしい路は無かつた。谷を通つたり山の背を通つたりした。山の背に出ると冷たい風が吹き透し、谷に這入ると蒸すやうに暑かつた。

荷物を持つて先に立つてゐる男は嫂の話をした。嫂にやられて足や手の指を無くしてゐるものは此村に澤山あると言つた。

又蝸の話をした。山に出て仕事をしてゐる時に蝸の聲程淋しいものはない。蝸の聲を聞くと大

急ぎで歸り支度をする。あの聲を聞くととても山にちつとしてゐられないと言つた。

彼の老人は一時間も経たないうちに私達の後を追うて山に來た。丁度私達が確とした足場も無いところに腰を据ゑて辨當を食つてゐるところへ。

老人は小柄な男であつた。此邊の山の主といはれてゐるほど此邊の山の境界歴史等に委しい男で、なか／＼食へない男だといふことをかね／＼聞いてゐた。私に挨拶したが顔は餘所を見てゐた。口許はすこし尖つていつも笑を含んでゐるやうに見えるが、それから出る落著いた調子の低い言葉は一句々に力があつた。

私は自分の盃を此老人にさしたが、

「酒はいかん」と手を振つて受けなかつた。

「折角ちやけれお受けるだけお受けや」と連れの男は取りつくらふやうに言つた。

「此度はもういかんと思うたが、まあどうやら助かつたやうぢや」と老人は盃を受取りながら自分の病氣の話をした。其話の模様によると大分腹を悪くしたらしかつた。

病後今日始めて山に出たといふのに、私達が苦しみ登つた道を輕々と登つて來たのは、山で鍛へた體は別だと首肯うなづかれた。年齢を聞いたら七十いくつだと言つたが、容貌は六十過ぎにしか見えなかつた。

「飯もすんだ」と言つて老人は折詰の飯にも箸をつけなかつた。唯一切れの澤庵をつまんでばかりと嚙んでゐた。

老人は考へ深さうに谷を見下ろしながら、ぼつり／＼とまだ病氣の話を續けてゐた。

晝飯を終つてから此老人の案内で、一つ越えて隣の谿に降りることになつた。木の根につかまつたり萱を握つたりして登つて行くのはなか／＼の難儀であつたが、老人は常に十間許り先に立つてゐた。

隣の谿はしめつてゐた。路の無い谿を下りて行く内に私達はいつか水の上を踏んでゐた。此水は谿を下るに従つて量を増してゐた。其水を跨間にはさむやうにして私達は谿を飛んで降りて行つた。

或時は落葉の上を踏んで一間許りも迂つた。落葉は皆濕つてゐた。

此水が漸くちよろ／＼した流れになつた邊から小さい山路があつた。私達は此山路を下つた。

山路を塞ぐやうにして一つの車があつた。これは車體の中央に唯一の車輪のある一輪車で、斯ういふ山路でよく見る車であつた。其車の上には薪が澤山積まれてあつて、其傍に水膨れのやうに膨れた色の青い一人の男がゐた。老人は連れの男に話しかけた。

「妙な聲をもろてな。はつはつは」

此突然な言葉は連れの男にも容易に呑み込まれなかつたらしい。

「えつほど面白い聲ぢやけれども、當人も辛抱する氣があるらしいから、まあえゝわいと思ふてるのよ」

私は丁度青彫れの男の傍を通らうとする時に此話が出たので、其男が此老人の聲なのかと思つて凝視したが、愚かさうな其男は唯餘所々々しく私達に會釋したばかりであつた。老人は其男に頓著なく話し續けた。

「馬を引張つて毎日山に行つとらい。何をしとるか知らんけれど、まあやる氣で居るらしいからやらして見るのよ」

「そりやえゝぢやないかな。さういふ養子がちやんとときまつたらおぢいさんも安心ぢや」

連れは老人の話の腰を折らぬやうに斯う言葉を挿むのであつた。

「安心だか不安心だか、まだ判つたもんぢやないわいな」

「どこの人ぞな。北海道の人かな」

「いゝえ。砥部とくべのものよ。北海道に行てはゐたんぢやけれど生れは砥部のものよ」

「そりや尙ほえゝわい。それで今迄山の仕事はしたことなかつたのかな」

「さうよ。若い時分に百姓はしたことがあつたらしいが、山の事は何も知らんのよ」

こんな話をしてゐる間にも老人は考へ深さうにしてゐた。連れの男が、

「そりや善かつた」といふと、

「まだ善よえのか悪いのか判るもんか」と老人は不安さうに言つた。

「それもさうぢやなあ」と連れの男が其不安に同じると、

「まあ一生懸命にやつとらいな」と老人は其連れの男の不安に同じたことが氣に食はぬらしかつた。

二人の間の話はぼつり／＼といつ迄も此の一つの話題にひつかゝつてゐた。老人はいつも考へ深さうに俯向き乍ら話してゐた。連れの男は老人の氣分を損はぬやうにといつも同じやうな返辭をしてゐた。

其一つの話題がいつ迄も二人の間にこびりついてゐる間に、彼の谿間の落葉を濡らしてゐた水はだん／＼と量を増して、今はもう立派な流れとなつてゐた。或時は虎杖の林の下を走り、或時は岩壁の下に湛へ、或時は石から石にむせび落ちてゐた。水の幅は一尺から二尺になり、二尺から三尺になつた。

「此邊で岩魚が取れるぞな」と老人は始めて氣がついたやうに其水を見た。

「さうかな、岩魚がとれるかな」と連れの男も其水を見た。

私は此時始めて此水が、彼の山に這入る時常に私達を離れなかつた川の水上であることに気がついた。

私達は川に沿うて下つた。

杉山の麓も通つた。檜山の麓も通つた。雑木山の麓も通つた。川水は音を立て、脚下の谿を流れてゐた。

水車があり田地があつた。家もあつた。私達は漸く村に出たのであつた。

村に出たと思ふと直ぐもう老人の家の下にゐた。

「少し休んでおいき」と言つて老人は先に立つた。私達は老人のあとに従つた。

「お歸りなさいませ」と彼の無造作に髪を束ねた木綿の袖無しを著た女は言つた。縁には別に二人の女が腰掛けてゐて今迄無駄話をしてゐた容子であつた。

此二人の女は私の連れの男とも知り合ひと見えて會釋したが、私達に席を譲つて、やがて歸つて行つた。

二人の女に行届いた挨拶をしてから、此家の女は私達に茶を酌んで出した。其茶はぬるかゝつた。女は庭に降りて籠の下をいぶし始めた。

私達は草臥れた足を休めて暫く縁側に腰を下ろしてゐた。老人は著物を脱いで手拭で汗を拭い

てゐた。割合色の白い皮膚に肋骨があらはに見えてゐた。

「お瘠せたな」と連れの男は其老人の肌を見て言つた。

「えゝゝ瘠せてしもた。これでも一時よりは少し肥えたのよ」と老人は四邊を見渡しながら言つた。

庭の向うには生木の割つたのが澤山積重ねてあつた。其薪を隔て、見る向う山は、此邊の山の主といはるゝ此老人に格別の親しみを持つやうに柔かく峙つてゐた。又此老人の住み古りた此家は後ろの山の翠微に包みはぐまされるやうに朽ち古びてゐた。

汗を拭ひ乍ら老人の眼は狡猾さうに私達の方を偷み見てゐた。

其時であつた、蹄の大地を踏みしめるやうな音が聞えはじめたのは。間もなく馬の首が、其鬣を波打たせ乍ら、其處の坂を登つて私達の眼前に現はれた。馬の背には大きな生木が、まだ丸のまま、積まれてあつた。躍るやうに坂を上つて來た馬が鬣をふるはして其處の庭に突進んで來た後ろに私は一人の男を見出した。其男は馬の絆を確と手に握つてゐた。

其男は手拭で頬被りをしてゐたが、其手拭に包まれた顔は生白かつた。さうして著しく人の眼につく八字髭が鼻の下にはねてゐた。又少し開いた口からは金齒が光つてゐた。

此男の後ろには一人の女がゐた。それは五十を過ぎた年とつた女であつた。其女も頬被りをし

てゐたが、すぐ其手拭を取つて私達に會釋した。其顔は善人らしく齒は黒く染めてゐた。

「これが老人の女房で、金齒が娘の養子だな」とすぐ合點が行つた。

養子は私達に會釋もせず、私達を突き抜けて馬と一緒に庭の真中に突立つた。丁度其時私達は縁から立上つて歸る支度をして居た。

私が與へた若干の金を老人は見ぬふりをしてゐた。袖無しを著た娘は再三辭退した末受取つて老人に示した。

老人はそれをも見ぬ振りして馬の傍に行つた。さうして養子に手傳つて、其馬の背の生木を大地に下ろし始めた。

養子は縞のシャツと縞のツボン下を著けてゐた。八字髭や金齒が不釣合なやうに此の縞のシャツやツボン下も山人には不調和なものに思はれた。

私達が歸るときに、二人の女は庭に立つて腰をかゞめてゐたが、二人の男は馬の傍に突立つてゐた。

歸り路に私は連れれの男から斯ういふ話を聞いた。

袖無しを著た娘といふのは、松山に出て酌婦をしてゐたこともあつたが、それから轉々して北海道に渡つてゐた。それを老人の病氣の爲に十何年ぶりに呼び戻した。間もなくあの養子といふ

男が北海道から來たのだと。

(大正九年七月)

私は曾て亡兄の事を書いた。今又亡嫂の事を書かうと思ふ。

私は人の忌目をよく忘れる。物に觸れ事に應じて亡き人々を追憶することは或は人にも増して強い方かも知れないが、墓參を怠らぬとか祭祀を缺かさぬとかいふ事は私には出来ぬ。私は曾て親にも増して養育の恩を受けた老兄の事を記録して之を以て平素供養を怠つてゐる責めてもの償ひにしようと考へた。今また亡き老嫂の事を記すのも之を以て香花の手向けに代へようとするのである。佛は果して快く之を尙けるかどうか。

嫂は私が二歳の時十七歳で兄の許に嫁いで來たやうに聞いて居る。或は三歳の時十八歳で來たのかも知れぬ。さうすると兄は二十二歳か二十三歳であつたのだ。

曾ても記したことがある通り、私達一家は私の生れた年、松山の城下を離れて別府村字西の下といふ所に郷居した。刀槍から離れて百姓になるつもりであつたのである。

父は兄の十八歳の時に隠居して一家の計を兄に任したといふのであるから、此の勇斷は兄の志

に由つたものであらうか。恐らく是はさうではあるまい。刀槍で鍛へた父の體は百姓になり得る自信があつたらうが、生れて羸弱であつた兄は決して好ましいことには思はなかつたらう。即ち父の意思に因つたもので、兄は經濟上の見地から賛成したものであらう。僅かの祿券を貰つた位で一家を支へ得るものでないことは明白であつたので、先づ松山を離れて田舎に移ることは生計が容易であり、父がまだ四十九歳の壯年であつたところから農事の一切は父に任せ得るものとして兄は賛成したのであつたらう。

父は二十一歳、十七歳、十四歳、當歳の四人の男の子と老母と妻とを引連れて前途の生活に不安を抱きつゝ田舎に引込んだのであつた。

父は幕末最後の武士教育を受けて劍槍の道に繋つて扶持士もちざしから百石の知行取りちぎょうとりに漸く漕ぎつけたと思ふと天下がひっくり返つたのであつた。さうして松山の城下をのさばり歩くのは薩長の士であつた。在來の松山藩の士は見る影も無い有様であつた。父が歸農を思ひ立つたのは當然の事と思ふ。

さて西の下しげに郷居して父は眞先に鋤鉞を取つて農事に携はつた。當時十四歳の季兄が中で父の手助けになり糞尿を運ぶ仕事迄した。

中兄は長く西の下しげにゐなかつた。松山に出て師範學校に這入つた。

兄は村の小學校の教員を勤めた。月給が二圓か三圓であつた。

父は劍槍を鋤鋏に代へて働いた。一家の經濟は兄が主宰した。

兄は二十二歳か三歳の弱年で結婚し一家の柱石として年齢よりも老いた境界に立たなければならなかつた。

同じく西の下に郷居した仲間が他に三軒あつた。其一軒の荒川といふうちに兄より二つか三つ年上の娘さんがあつて、養子を迎へて既に一家の主婦であつた。さうして村の百姓の娘達をお針子に取つてゐた。嫂は此お針子の一人であつた。私が子供の時荒川のをばさんと呼んでゐた美しいをばさんが兄夫婦の仲人であつたのである。

大分古い昔話である。大方の人は皆死んで居る。父も、母も、季兄も、荒川のをばさんも、兄も、嫂も、皆亡くなつてしまつて居る。今の話のうちで生き残つてゐるのは今年六十二歳の中兄と四十七歳の私ばかりである。

さて其頃の兄は美しい若者であつたに相違無い。嫂もまた美しい娘であつたに相違無い。此若い夫婦が楽しい月日を平和な田舎生活のうちに迎へたことは間違ひの無い事實である。

村に山田といふ體格のがつしりした、罪の無い大きな聲を出して笑ふ醫者があつた。また高本かうもとといふ背のすばぬけて高い、顔の長い、喉笛の大きな小學校の先生があつた。此人達を集めて荒

川のをばさんや中兄やが中堅になつてカルタを取つた話が長く談柄になつて残つてゐた。

又春になると私達の家から近い海濱に遊びに行つて老も若きも鬼事などをして遊んだ話もよく聞いた。一人の娘が鬼の手を逃れようとして一生懸命に走つて來るのをいたづらものゝ中兄が一寸足を突き出すと其娘がもんどり打つて砂上に轉がつた。それがまだ兄の妻と話の始まる前の嫂であつたといふことを、今年嫂が亡くなつた通夜の席上で中兄が話して笑つた。

私はちだんだを踏んで怒つてゐる四つか五つの自分を見出す。母は、

「そんなら此處で隠れんぼをせうわい。さあお千代さんお前もお隠れ」と言つて板間に廣げ乾してある傘の中に隠れる眞似をした。嫂も母に倣つて同じやうなことをした。其見え透いた氣休めが癢に障つて私は益々泣き叫んだことを覚えてをる。これは母や嫂に庭に出て隠れん坊をせうと強請した時のことであらうかと思ふ。千代といふのは嫂の名前であつた。戸籍面はイワとなつてゐるが嫁して來てから千代と呼ぶやうになつたのである。

又私は母に背負はれ、嫂に傘をさしかけられて、夕暮の蓮池に對してゐる同じ年頃の自分を見出す。

「それ御覽、何もあるまいがな」と母は言つた。嫂は黙つて傘をさしかけて突立つてゐた。今迄駄々をこねてゐた自分が此夕暮の淋しい景色にふと我に歸つてしみじみと物淋しさを覺えた。

「もう歸らう」と言つた。

「さあ歸らうぞなもし」と嫂は言つた。

「それ御覽、わからんことをお言ふものぢやないぞな」と母はたしなめるやうに言つた。この蓮池は一丁許り家を離れた處にあつた。私は何か其處に或幻影を描いて是非連れて行つて見せて呉れと無理を言つたものであつたらう。淋しく暗い蓮池が忽ち私を幻滅に導いた、其時の景色や心持が今でも強く頭に残つてをる。

嫂は私に對して敬語を用ひて居つた時代があつた。これは百姓の娘であるといふことがまだ階級思想の強かつた時代の嫂を驅つて自からさうせしめたものであつたらう。併し其時代は長くはなかつた。だん／＼と對等の言葉になつた。中兄や季兄に對しては最後迄敬語を使つてゐた。

祖母はしつかりした女であつた。父の代の經濟は祖母がいつも主管してゐた。母は主婦としてあれども無きが如きものであつた。

餘談ではあるが母の里方山川家の父は母が生れて後に浪人して松山藩以外の地に流浪せねばならなかつた。虚無僧になつたり寺子屋の師匠をしたりして他藩の領地に年月を送つてゐた。其故母は其大叔父に當る松本といふ闇齋派の漢學者の家に養はれた。この人は一生結婚せず、机や障子に塵の積るのを掃除せしめぬといふ變つた人であつた。さうして鼓の上手であつた。浪人の娘

は恰も此の老漢學者の世話をするのに適當といふところから其家に引取られたのであつた。其娘が老漢學者から教はるところのものは師家短歌、百人一首一夕話、東遊記、西遊記、そんな風のものであつた。母は此の松本老人百歳の後でなければ人に嫁することが出来なかつた。さうして二十六七歳で父に――後添ひとして――嫁したのであつた。其嫁入道具は老人の形見である漢書類や雑多の寫本であつた。鼓の箱の類もあつた。――其鼓の箱は今私の手許に在る。一度中兄の手許に在つたのであるが私はそれを貰ひ受けた。母の娘時代を追想することの出来る唯一の形見である。――其母に經濟的手腕を待つことは無理な註文であつた。祖母は此母を信頼しなかつた。祖母は年の若い孫嫁に望を囁した。

西の下郷居の事を父が母に話した時、母は何と答へたらう。母は、

「あなたやお姑さんがえゝとお思ひなされることなら……」と一も二も無く同意したに相違無い。さういふことに意見を挿む母ではなかつたと思ふ。さういふ地位も與へられなかつたらうし、さういふことに意見其ものも無かつたらうと思ふ。唯其の場合斯ういふことが頭を往來したことだけは十分に想像し得る。

「浮世を離れたお百姓暮し、それは風雅で面白からう」

松本老人の書齋の書物の中から得た何物かを夢の如く空想して、それが其百姓生活のうちに見

出されるやうな一縷の樂しさを覺えたに相違無い。母の現實生活は痛ましい迄に苦痛なものであつたらしい。嚴冬に板間に坐つて火鉢は勿論座布団も與へられなかつた。踵の中央迄割れたかと思はるゝあかぎれに冬中なやまされたといふやうなことは母自身から聞かされた。お姑さんがむつかしいのに一言の口返辭もせずようお勤めるといふことが隣近處の評判であつた、といふことは子規母堂の親しく私に話されたことであつた。季兄が子供の頃、家族一同が食膳に着く時、副食物を皿に盛り分けるのは尙ほ祖母の役目で、一番最後に母の皿に殆ど食へないと思はるゝ残滓が盛りつけられるのを見て、季兄が子供心に憤慨し、

「お母さん、これお食べ」と自分の皿に盛られたのを母の前に突き出すと、母は、

「そんなことをお言ふものぢやない」とたしなめるやうに言つて祖母の手前を兼ねながら季兄の前に突き戻す、ふと父の顔を見ると、父は恐ろしい眼をしてちつと季兄を睨みつけてゐた、といふやうなこともあつたさうである。これは季兄の話であつた。私の物心ついた頃の祖母はもう七十前後であつてたゞ私を無上に可愛がつてくれた。私はなつかしい祖母としてたゞ記憶に残つて居る。

祖母はよく私に肩や腰を叩かせた。母は少しもさういふことを私に言ひつけなかつた。それで母が徒然さうにしてゐる時私は後ろに廻つて、

「お母さん叩いてあげよう」と言ふと、母は、

「いゝえ、母さんはえゝ」と言つて辭退する。子供心にそれを辭退する母をいちらしいやうに思つて私は、

「まあ〜」と言つて強ひて後ろに廻つて母の肩を叩いてやる。母は、

「もう清さんお止め。もうえゝぞな。〜」と辭退する、斯ういふ事はよくあつた。

或時祖母はいつもの如く私に叩けと命じた。私は叩きながら、いくらか祖母に馴れ戯れる積りで、十許り叩いては、

「お祖母さん、もうえゝかな」といふと、祖母は、

「もう少し」といふ。又十許り叩いては、

「もうえゝかな」といふ。こんなことをしつこく繰り返してゐるうちに、祖母は辭を激まして、

「もうえゝ」と言つた。私は呆氣に取られて又叩きかけると、祖母は再び言葉を激まして、

「もうえゝ」と繰り返した。私は悄然として兩手を収めて傍に坐ると、祖母は斯ういふ事を言つた。

「お祖母さんはお前を可愛がつて上げてをるのにお前はお祖母さんを大事に思はん。お母さんはえゝ〜とおいるのにお前は叩いて上げう〜といふし、お祖母さんは叩いておくれといふのに

叩いてくれん」

さう言つて祖母は聲を曇らした。私は夢から覺めたやうな心持がして、

「お祖母さん叩いて上げう。叩いて上げう」と繰り返して言つて其の後ろに廻つたが、祖母はもう叩かせなかつた。

話が枝葉に涉つたが、さういふ關係の祖母と母との膝下に來た嫂は、自然祖母の勢力の下にあらねばならなかつた。のみならず嫂の性質は母よりも祖母に近かつた。嫂は學校に通はなかつたので目に一丁字が無かつた。母の空想的文藝的なのに反して嫂は實際的であつた。祖母が、老いて松山を去り西の下に郷居することに異存が無かつたのは主として經濟的に考慮した上のことであつたらう。此點に於て祖母と兄の意見は一番一致したことであらう。母が霞の野に揚る雲雀を仰いで考へたり、松原越しの海に落つる秋の入目を眺め入つたりしてゐる間に祖母は若い孫嫁にせつせと家事の薰育を試みたことであつたらう。斯くして經濟本位から之を言へば私の家庭の主權は祖母の手から嫂の手に渡されたと言つてもよいのであつた。

それでゐて母は經濟的主權の自分に來ぬことを不平には思はなかつたであらう。さういふ手腕は全然自分に缺如せることを自覺して、終始自分に對する給養の少いといふことをも餘り心にか

けなかつたらう。

嫂の立場は決して樂なものではなかつたに違ひ無い。祖母、舅姑、それに男三人の小姑、其間に處して行かなければならぬといふことは決して容易なことではなかつたに相違無い。

嫂は殊に父に心服してゐた。若し彼女が生涯接觸した人のうちで何人を最もえらしとするかと聞いたならば彼女は「お舅さん」と答へたに違ひ無い。少くとも彼女の夫たりし兄よりもより多く父に推服し信頼してゐたやうである。これは後年何かの話の序に屢々彼女の唇を洩れた言葉から推察される。

父は決して平生聲を荒らげて人を叱るやうなことはしなかつた。たゞ非理智的な母が時に邪推し、むかつ腹を立て、

「お千代さんが……」と嫂の處置に憤慨するやうなことがある時に、母を叱りつけることがあつた。

「あれはお母の一ぶり（一刻のこと）ぢやけれ、お千代氣にかけるなよ」

父は一方言葉を和らげて嫂をなだめるやうに言つた。

時としては父は又いつ迄も黙つてゐることがあつた。さういふ時は嫂の方にも落度があるのであつたらう、最後に嫂が泣き乍ら母に詫びてゐるのを時々見た。

母の怒りはいつも決して長くは續かなかつた。すぐ、

「お千代さん」と今の事は忘れたやうにもう親しみを持つて嫂に呼びかけるのが常であつた。或時父は、

「それはお千代にも似合はん、たしなみの無いことぢやないか」と稍々言葉を激まして叱つてゐたことがあつた。これは父が嫂を叱つたのを私が聞いた唯一の場合であつた。今から想像すると其頃まだ三十臺であつた兄に何か嫂が嫉妬を起して居たそれをたしなめたものであつたらしい。丁度兄が出掛けで着物を着かへてゐた、其のこちらの方で嫂は相形を變へて立つてゐた。それだけの光景が私の眼に在る。

經濟上に於て無能力者として家計の事は凡て兄に一任してしまつた父も、其威其徳に於てはいつまでも絶大なる一家の君主であつた。

父は能樂に嗜好を持つ外、何の道樂も無かつた。たとひあつても之を節した。食物も質素であつた。衣服も質素であつた。身を持つることが嚴格で、老母には至孝で、——父は祖母の命令に一度でも背いたことが無かつたさうだ、たとひ少々無理なことでも是に服従したといふことである。

——目下の者には寛容であつた。兄もまた自ら持すること儉素に、兄弟に友愛で、知人にも親切であつたが、我儘で執拗で偏狹であつた。其點は父と大分趣を異にしてゐた。嫂が生涯接觸した

人間のうちで父を最も偉大なるものと考へてゐたのも嫂としては決して間違つた觀察ではなかつたらう。

西の下の郷居生活に於て、兄が二三回の月給からいくらの月給に迄進んだか、いづれにしても其給料位の収入では生計は容易の事ではなかつたらう。やがて中兄は師範學校を出て、是は資格がある爲めに兄よりも多くの給料を小學教員として取るやうになつた。季兄は松山に出て當時流行し始めた靴工に身を投じた。

やがて兄も田舎の小學教員に前途の希望を繋ぎ兼ねた。兄は自分で榮達を望むわけではなかつた。一家の柱石として經濟を支へ、弟達を夫々一人前にする事に重責を感じてゐたのであるが、夫でもいつ迄も現狀に満足してゐるわけには行かなかつた。周旋するものがあつたので遂に松山に出て縣廳の屬吏になつた。獨り最後迄踏みとゞまつて百姓をしてゐた父も遂に志を擲ち一家を擧げて松山に歸るやうになつた。私は其時八歳で既に學齡に達してゐたので松山の小學校に入つた。

此頃の嫂に就いて私は餘り記憶が無い。それも其筈で兄は縣廳から越智郡の郡役所の書記に轉じ、三四年間松山にゐなかつたのである。

私は小學校に少し宛學ぶやうになつてから、嫂の字を知らぬといふことに就いて多少輕侮の念

を抱きはじめて。或時母は私に、

「清さん、お前嫂さんに字の事を問うたりしてはいかんぞな。嫂さんは學校にお行きなんだのぢやけれ、字はお知りんのぢや。それを嫂さんは耻かしがつとおいでのぢやけれ氣をおつけよ」と言つた。私は、

「あい／＼」と返辭をして置いたが、十歳の頑童はふと嫂にからかつて見度くなつて來た。或時私と嫂ばかりの時に私は石盤に字を書いて嫂の處に持つて行つた。

「嫂さん此字知つといでるか」

嫂は泣かん許りの不愉快な顔をして、

「何な、知つとるがな」と言つた。さうして、

「池といふ字ぢやがな」と苦々しさうに言つた。それは私の家の姓の一字であつた。私は其頃既に「高濱」の姓を冒してゐたがまだ學校などでは「池内」と言つてゐた。私は負けぬ氣になつて又石盤に別の字を書いて持つて行つた。

「嫂さん此字知つといでるか」

嫂はちらと見たが其顔は前よりも險惡になつた。

「人を馬鹿におしるのか」

さう言つて竈の前に在つた火吹竹を振り上げて私を打たうとした。私は笑ひ乍ら逃げた。子供心に私は痛いものに障つたやうな心持がした。どこかに痛快なところもあつたが決していゝことをしたとは思はなかつた。其以後二度と嫂の前では字のことは口にしなかつた。

子の無いといふことが兄夫婦に取つては誠に淋しいことであつた。

「もう十年になるのに」といふ言葉が時々私の耳に聞こえた。それは結婚後十年になるのにまだ子供が無いといふことを意味する言葉であつた。それが誰の口から洩れたといふことを明かに記憶しないが、兄夫婦に子供の無いといふことが問題になる度に屢々人々の口から洩れた。來客の口から、母の口から、時としては嫂自身の口から。

兄夫婦が越智郡書記として今治に赴任してゐた時、兄から來た手紙を読む父の傍に私は坐つてゐた。手紙を読み終つた父は母にこんな意味のことを話した。

「彌源（兄は通稱を彌源太と言つてゐた）からこんなことを言つて來た。お千代が妾を置けといふけれど、もう子は無いものと諦めて妾などを置くことはすまいと思ふ。また読み書きが少しも出來ぬことは不自由だと思つて假名だけを覚えさせてゐる。妙なものでどの字もこの字も皆同じやうに見えるさうで當人は非常に苦しんでゐる。とこないことを言つて來た」

「お千代さんがようまあそないなことをいうたなもし、妾を置けなにかといふことを」

「あのお千代の氣象ちや妾でも置いたらもめることぢやある」

「假名だけでも稽古して置きやあえゝわいなもし」

「さうよ」

父と母とはそんなことを話し合つてゐた。

子供の無いといふことは殊に嫂の不幸であらねばならなかつた。

「お千代は氣象の勝つた、よう氣のつく女ぢや」と父はよく褒めたが、

「どうも子供が無いので素氣ないところがある」と時に非難するのを私は聞いた。子供が無いといふ事の爲に女が天性持つてゐる性情の一部分を苞に包んだ儘で發育させずにすんでしまつたといふやうな處があつたのであらう。

「お千代は生素氣ない」といふ言葉を父母の晩年に至つて殊に私は度々耳にした。

兄夫婦の心は自ら私に傾いてゐたやうであつた。私は父の四十九歳母の四十八歳の時に生れた所謂年よりつ兒で、兄とは二十歳も年が違ひ嫂とは十五歳違つてゐたので、寧ろ兄夫婦の兒と言つた方が似合はしかつた。よく兄は私に向つて、

「嫂さんはお前の尿屎の世話からしたのぢやけれ」と言つた。兄は私を準養子にしようといふ下

心がたしかにあつた。併し父の考は違つてゐた。

「準養子といふものゝ丸く納まつて行く例は少ない。殊にお千代の氣象があれぢやけれ、清の嫁になるものが可愛さうぢや」

これが父の意見であつたことを私は後に母から聞いたことがある。それで私が九歳の時に祖母の里方である高濱家の名跡を私に繼がせた。兄は、此事を父から相談を受けた時何と言つたか。必ず内心不平であつたに相違無いが、併し強ひてそれに逆らふ程の勇氣も持たなかつたらう。さうして又一時さうして置いて他日別に仕様もあらうといふ位のぼんやりした考を持つてゐたことであらう。

父の死後に至つて兄は屢々私に斯ういふことを言つた。

「どうしても私等夫婦はお前に掛らにやならんのぢやけれ、學資は何を儉約しても出して遣る。精出して勉強おし」

私は此言葉を聞く度に重荷を感じた。同じく學資の半ばを出してくれる中兄が少しも條件を言はないで、唯黙つて出してくれる方により多く感謝した。尤もこれは中學校から高等學校に通ふやうになつてからの話である。

兎に角結婚後子供の出来ぬといふ事が明かになつてから、兄夫婦の心が私に傾いてゐたといふ

事は事實だ。其私から——自分の子供とも思つてゐるものから——自分の無筆といふ一番の弱點を愚弄せられたことがどれ程嫂を立腹させ残念がらせたか、今から考へて見ても氣の毒千萬の事である。私は子供の時は因循な程おとなしい子供であつた。それでゐて十位になるともうそろそろとそんな生意氣な考を起して來たのである。此一人の子供がゆく／＼兄夫婦の思ふ通りになつて行くかどうか、それは兄夫婦に取つて随分心細いことであつたに相違無い。

此頃の兄はまだ三十臺嫂は二十臺といふ人生に於て最も華やかな時代であつた。それでゐて子供の無いといふことがどれ程二人に取つて淋しいことであつたか。さうして此淋しさは實に兄夫婦の一生を通じて一貫してゐた淋しさであつた。

子供が無い爲めに兄は犬を愛した。嫂は兄程ではなかつたけれども兄の愛する犬であるから同じく之を愛した。或時は疊の上で飼はれてゐることもあつた。其犬は自分の尾を見て癩癩を起して夫を嘯まうとしてくる／＼圓を描いて吠え乍ら回るのが癖であつた。兄は別に夫を氣に掛けたが、父が其愚かで騒々しいのが癩になつて煙管を持つて其犬の頭に一撃を與ふことが多かつた。此子とも思つて可愛ゆがつてゐる犬の父の手によつて苛められることが兄夫婦に取つては堪へ難き不愉快のやうにいつも私の眼に映じた。夫に拘らず斯ういふ場合私の心は兄よりも父

に傾いた。父のすることは如何なることにもけちをつけ度くなかつた。少々残酷と思ひ乍らも此犬を打擲する父の行爲を是認して時に兄に反抗するやうな心持を抱いた。時々父の命令によつて私の手で此犬を打つこともあつた。打たれた犬は苦し紛れに疊の上に小便をして逃げた。兄や嫂は淋しさうにそれを見送つた。

これは父の死後であつたと思ふ。旅から歸つて見ると又一匹の犬が飼はれてあつた。それが慣れぬ私に吠えついた。老いた母は氣の毒さうに叱つた。嫂もまた叱つた。併し其嫂の叱りやうは母の叱つたよりも儀式的であつた。其後來客のある度、郵便屋の來る度にいつもけた／＼ましく吠えつく此犬を嫂は餘り叱らぬのが私に快くなかつた。

「赤(犬)が吠えつくのでお客様や郵便屋に氣の毒でたまらん」と母は頻りにそれを氣にしてゐた。私は其母の言葉を尤もと考へた。

或時郵便屋が恐る／＼郵便を配達して來た。赤はいつもよりも激しい勢で吠え立てた。郵便屋の敗亡してゐる容子が想像されて私の犬に對する平生の鬱憤が破裂した。玄關に出て行つて此畜生をいやといふ程擲つた。其あとで見た嫂の顔は抑へ難き怒りを強ひて抑へてゐるもの、やうに見えてそれが又私に憐らなかつた。

犬といふものだけについても所謂肉身で無いもの、間の感情の乖離は、相互に残念に思ひ乍ら

抑へることの出来ぬものがあつた。行く／＼は自分の子として掛らねばならぬと思つてゐるものの心の上についてのか斯ういふ影の生じつゝあるといふことは、定めて嫂に取つて不満足のことであつたらう。

百姓の娘であるといふことが嫂の弱味であるだけ易めて自己を高く標置しようとする傾きが強かつた。出入の商人などに用ふる言葉は母よりも嫂の方が尊大であつた。中嫂季嫂に對する嫂の言葉が姑の嫁に對する言葉のやうであつた。或時母と父との間にこんな會話が取り交はされてゐた。

「お千代さんがお琴さん（仲嫂）やおいくさん（季嫂）にあないな言葉を使ふのは見苦しいなもし。あなたからさういうてお遣りなさいますか」

「いつやら嘉源（中兄の通稱は嘉源次と言つた）や治（季兄は治三郎と言つた）にさう言うたら、そないなことは嫂さんに言はずに置いてくれ、あれで差支ないから、といふからまあ其儘にしとかうよ」

父にしても母にしても嫂の負けん氣なことをよく知つてゐた。そんな形式的な事で嫂の氣を悪くして、其爲め嫁同志の間がうまく行かぬやうなことがあつても馬鹿々々しいと考へて、其問題は其なりに葬られてしまつたやうであつた。其爲め生涯嫂と季嫂との間の會話には、（其頃の中嫂

は早く亡くなつた）嫂の、

「さうかな。さうおしたか」といふやうな言葉に對して、季嫂の、

「さうしました。さうでございます」といふやうな言葉が取り交はされてゐた。

斯ういふやうな幾らか無理に自分を高うせうとするやうな氣位が嫂の缺點といへば缺點であつた。併し又此氣象が、身分の違ふ家から嫁して來て——身分といふことを私はよくいふやうであるが、今から三四十年前はまだ士と農といふものゝ間には相當に溝渠があつた。今日の華族と士民との間の溝渠よりもつと甚しかつたと言つてもよい。私の家などは特にそれを打破するのに傾いた方で現に百姓の家と婚儀を取結んだ位であつたのであるが、それでも其頃の時勢はどうすることも出来なかつた。——而も目に一丁字の無い身であつて、舅、二人の姑、三人の小姑のあゝる間に處して、豊かでない家政を處理して、或意味からいふと随分我儘な、坊つちやん育ちの兄に仕へて、失態も無く、品位をも相當に保つて遣り通すことを得せしめたのである。

兄の經濟の方針は極めて消極的で極めて綿密であつた。小さい三つ抽斗が備へられて其一番上の抽斗に一回紙幣が一枚這入つてゐる時は此の小遣函の最も富んでゐる時であつた。一度兄の手に渡つた紙幣は折目や皺などは決してついてゐなかつた。嘗てついてゐた皺でも折目でもちやんと兄の手によつて直ほされた。其一枚の紙幣が新しい魚が尾鰭をはねて威張つてゐるやうに抽

斗の中に唯一枚ふんどりかへつてゐた。此紙幣が銀貨や銅貨に姿を變へる迄には成るべく多くの時日の費されるのが常であつたが、遂に或買物の拂に使用されて其釣銭として受取られた銀貨や銅貨は決して雜然と抽斗になげ込まれるやうなことは無かつた。其三つ抽斗の中の抽斗は五通りに仕切られて二十錢銀貨、十錢銀貨、二錢銅貨、一錢銅貨、五厘銅貨が各々分類され、列を正して其中に收められてあつた。一番下の抽斗には天保錢、二厘、一厘の小錢が、これは別に分類されもせず収められてあつた。

此三つ抽斗から金錢を出納することは嫂の役目であつた。

「清さん、其中から五厘持つて来ておくれ」など、私は嫂から命令を受けることも珍らしくなかつた。學校で入用の筆墨紙類を買ふ時も此の抽斗の中から二錢か三錢を取り出すのであつた。

小遣帳は兄が自ら筆を取つて附けた。嫂は自分で筆が取れぬ爲めに記憶を頼むよりほか無かつた。右の三つ抽斗が兄の前に持ち來たされて兄がむつかしい顔をして十露盤を手にして居る、嫂が是も苦い顔をして其前に坐つて頭の底から何かをしぼり出さうと苦心してゐる、さういふ事が隔日若しくは三日置き位には繰り返された。これは何か嫂の記憶落ちがあつて、嫂の口から話される支拂を兄が帳面につけて扱つて十露盤を置いて見ると現金と突合はぬので、夜の燈下の静かな時間のうち一時間か二時間は其の附け落を思ひ出すので嫂は苦心するのであつた。兄は決してそ

れを苟に許すことをしなかつた。たとひ五厘でも一厘でも、不足する場合は眉間に深い八の字の皺を寄せて其勘定を止めなかつた。

是は大分後年になつて、兄が歿する一二年前の事で、其席上に嫂の居ない、兄と私と二人きりが靜かに物語つてゐる時の事であつたが、兄は斯ういふ事を私に話した。

「お千代は百姓の家庭にようある習慣と見えて、ほま、とかいうて小遣のうちを少し隠すやうなことを時々した。もう今はそんな事もないやうぢやが。その外にこれというて金の上で悪い事は無かつたやうぢや。私が死んだあとはお千代はどうしてもお前の厄介ぢやが、まあ面倒を見て遣つておくれ」

此時の兄は殆ど一家の後事を托す積りで何も彼も私に話したのであつたが、其話の中に右の一節があつた。自分の妻が百姓の出であるといふ事は決して兄の誇ではなかつたに相違無い。殊に無學であつたといふ事も兄終生の恨事であつたらう。それに拘らず兄は此時極めて落着いた靜かな態度で自分の妻のそのやうな暗い方面迄を凡てさらけ出して私に話した。私は淋しい淨い心持で其話を謹聴した。

要するに、兄の嫂に對する金錢上の監督は極めて峻嚴であつた。決して苟もしなかつた。嫂に與へられる持前の小遣といふものがあつたかどうか、夫は判らないが恐らく無かつたらうと思ふ。

其の湯錢、髮結錢といふやうなもの迄悉く此の三つ抽斗の中から支出されてゐたやうに記憶する。家庭外に足を踏み出すといふ事は殆どなかつた嫂は湯錢、髮結錢といふやうなもの以外に格別小遣の入りやうは無いといふ理由のもとに絶対に支給されなかつたかと想像する。

尤もそれは嫂許りで無く、父にでも母にでも別に特別の小遣といふものは渡されなかつた。凡てこの三つ抽斗から取り出された。父は人から頼まれて下實生流の謄本を寫した。夫が半紙一枚一錢とか二錢とかいふ報酬を自ら受けることになつてゐた。それが父の小遣になり時は母の小遣にも、亦時には私の筆墨紙代の一部分にもなつた。私が中學校に這入つてから間の無いことであつたがウェブスターの中辭典が買ひたいと母に打明けたが、母は兄には話し兼ねて父に話した。父は其の寫本の収入のうちから買つてくれた。それは父が何百枚の寫本の勞力の結果であつたのか、今考へて見ても濟まないやうな心持がする。

お八つ即ち今東京でいふお三時といふやうなものは私の家庭では行はれなかつた。さういふ贅澤なものと思ひもよらぬことであつた。餘所から菓子折を買つた場合などは先づ深く／＼戸棚の中にしまはれた。來客のあつた場合に始めてそれが取出されて客の前に出された。若し其處に二つ菓子折のある場合は、古く貰つた菓子折の方に先づ手がつけられて新らしい方はあとに廻はされた。斯の如くしてあとに廻され／＼した菓子折は大分日數の経つのが普通であつた。さうして

其中の生菓子なまは稍、堅くなつて少し酸味を帯びて來ることも珍らしくなかつた。私が學校から歸つて來ると、

「清さん、其處の戸棚の中のお菓子を一つお食べや」嫂は時に私に言つてくれることがあつた。「どのお菓子ぞな」と私は其處に在る二つか三つの菓子折に目をさらし乍ら命令を待つて居ると嫂は、

「その取りかけのぞな。一番上に在るのぞな」といふ。斯くして其菓子折の中に残つてゐる菓子をつまんで口に入れて見ると大方周りが堅くなつて少し酸味を帯びてゐた。客から貰つた新しい菓子折の蓋を開けてすぐ其菓子を口にするといふやうなことは殆どなかつた。私は子供心にさういふ事は絶対に出來ぬものと考へてゐた。

たとひ堅くなつてゐても少々酸っぱくなつてゐてもさういふ菓子にありつくことが出来るのは一家の愛の中心であつた私なればこそである。嫂自身が菓子をつまんで食つてゐるといふやうな容子は一度も見ることが無かつた。嫂許りでなく母でもさういふ事をしてゐる場合は殆ど目に残つてゐない。

兄は屢々大病をした。私が九つの年であつた、兄は熱病にかゝつた。七十の祖母は憂慮の餘り

腦溢血を起した。さうして其夜中に亡くなつてしまつた。私は子供心に此時の家庭の混亂状態を物恐ろしく記憶してゐる。さうして嫂の其間に處して活躍してゐたことを臚ろ氣に覚えて居る。尤も此時はまだ九歳といふ幼年時代で夫は誠に臚ろ氣な記憶であるが、其後父の死の前、兄が激烈なるマラリヤの時、再度のチブスの時、母の死の前、兄が腦溢血の時、それ等の時の嫂の働きはまざ／＼と目に残つて居る。さうしてそれは立派な働き振りであつたといはねばならぬ。

私が二十二三の時であつたと思ふが、「兄大病すぐ歸れ」との電報を受取つた。其時私の家に歸つた時の光景がまだ目に残つてゐる。私が玄關の戸を開けて内庭に這入つても誰も出て來なかつた。下駄を脱いで上に乗つてもまだ誰も出て來なかつた。茶の間に入つて見ると、丁度老母が――父はもう歿してゐた。――よろ／＼と兄の病室から出て來た。私は挨拶しようと思つて近よると、老母は私の方を見向きもせず、殆ど私と擦れ違ふ位に通り乍ら又病室に這入つて行つてしまつた。私は暫くあつけに取られて茶の間に立つてゐた。其處へ出て來たのは嫂であつた。嫂の顔も緊張してゐたが、すぐ私を見つけて、落ついた調子で、遠方を歸つて來てくれた挨拶と、兄の病状とを話した。

丁度兄は難題を持出して介抱人を手こずらせてゐるところであつた。夫は激しい熱病であるに拘らず、酸つぱく漬り過ぎた位の莖漬で茶漬が食つて見度いと注文であつた。老母は百方夫を

止めるけれども兄は頑強に承知しなかつた。老母が風の如くふら／＼と茶の間に出て來て私の傍を通過しながら又病室に這入つて行つたのは、此兄の頑強なる主張に困り果て、ちつとしてゐることが出來ず、失神したものゝやうに其邊を一廻りして來たのであつた。嫂は私の姿を見て、早速私にそれを兄に止めることを依頼した。

「嫂さんがいふと兄さんはお怒る許りで仕様がなから、丁度えゝところぢやあつた、清さん話しとおくれ」

私が病室に這入つた時、母は涙ながら兄に思ひ止まることを懇願してゐた。殆ど兄の病床下に俯して祈るやうな態度で。けれども兄は尙ほ聽入れる模様が無かつた。

病床の兄は私の顔を見て先づ驚き喜んだ。さうして、
「清、お前がさういふのなら止めろ。熱病というたてゝ、チブスぢやないのぢやけれ、醫者はマラリヤぢやといふのぢやけれ、茶漬位かまはんことは知つとる。けれどもお前迄さういふのなら止めろ。お前のいふ事なら聞かう」

さう言つた兄の目には涙がにじんでゐた。母は此一事を思ひ止まらさなければ兄の一命はもう無いものと考へてゐたのが漸く事無きを得てはじめて安心したやうに曇つた目を私に向けた。さうして漸く久しく逢はなかつた末子の歸つて來たことを意識したやうに私に言葉を掛けた。

兄の先輩で多くの場合兄の保護者であつた藤野翁はよく兄の前で私に向つて、

「兄さんは總領の甚六で、あまやかし兒と來てゐるものぢやけれ、病氣の時などはそりや我儘よ。嫂さんは大抵の事ぢやないぞな」と、笑ひ乍ら斯ういふ意味の事をよく話された。さういふ時兄は苦笑しつゝ、内心甚だ平かならぬ模様であつたがそれでも黙つてゐるのが常であつた。

藤野翁の言の如く嫂はなか／＼大抵ではなかつた。併し如何なる場合も狼狽したり取り亂したりするやうなことは無かつた。如何なる難境に立つてもそれを切り抜けて行く思慮と手腕は持つてゐた。

嫂は介抱の爲めに池内家へ來たやうなものだと兄は時々私に話した。病人が出來た場合は嫂はいつも介抱の役廻りに立つた。仲嫂、季嫂には夫々子供がある爲めに父の歿前も母の歿前も一切を引受けて介抱主任となるのは自ら嫂であらねばならなかつた。屢々大病をした兄の介抱はいふ迄もないことであつた。祖母を見送り、父を見送り、母を見送り、兄を見送り、凡て其等の介抱を十分にして、さうして兄の歿後三年にして嫂は歿した。全く介抱の爲めに池内家へ來たと言つても誣言ではなかつた。

病人のある場合に限らず平生皆が健康な時でも嫂は決して空しく手を休めてゐるやうな事はなかつた。

祖母に對して嫂がどれ程孝養を盡したか、それは私の記憶に無い。併し父、兄等に對する日常の奉仕は樂なものではなかつた。平和な灯火の點された夜の團欒——ホヤが特別に綺麗に拭はれたラムプが室の中央に置かれて、臺所の雜仕が終つて後ちの一家族が、其ラムプの光りのもとに集つた時に、嫂は其手を休めずに父の肩を揉むか兄の腰を叩くかすることは殆ど日課であつたと言つてよい。尤も私も物心つき始めてから其嫂の勤勞の一部分を分け前取つた。斯くして父や兄の肩を叩き腰を揉み乍ら浮世話に一家族は夜を更かすのであつた。これは恐らく我家庭に於いて最も楽しい時間であらねばならなかつた。其家族の最も楽しい時間——恐らく嫂自身に於いても最も楽しい時間——も嫂は尙ほ勤勞の手を休めなかつたのである。

晩年の嫂は手首や足首を激しいリウマチスに悩まされた。これは若い時分からの此の按摩が主な原因を爲してゐるかも知れなかつた。

私も病氣の時などは此の嫂の按摩を受けたことがあつた。それは極めて上手なものであつた。此の嫂の按摩になれた兄は、普通の按摩はコツを知らぬと言つて喜ばなかつた。

父の病氣は胃痛であつた。其痛む時は手の下しやうも無かつたが、背をさすつたり足をなでたりすることは母や嫂が代り合つてしてゐた。私も學校から歸ると是に代つた。嫂は臺所の雜仕を手づからした上に介抱に回らねばならぬので其辛勞は大抵ではなかつた。

「お千代はようしてくれる」と病床の父が人に話したことを、私は傍に在つて聞いたことがあつた。

「お千代は生（なま）素（す）氣（き）なうていかん」といふことは其石（いし）婦（こ）であるところから來た性情の缺陷を憐（れん）らなく思つて言つたことである。其缺陷は缺陷として嫂の力一杯に盡してくれた孝養は父を十分に満足せしめ得たものと私は認める。

父の時許りで無く、母の歿前もまた嫂の辛勞は一通りではなかつた。其頃私は東京に家を持つて、丁度ホトトギスを自分のものとして東京で發行しようと思畫してゐた時で、其計畫を兄に相談旁々母の介抱を兼ねて國へ歸つた。母は心臟が悪かつたので水腫を來たしてはまた一時夫が癒えたりしてふら／＼してゐた。私の歸つた時は多少むくみ、の來てゐた時で、呼吸困難を訴へ乍ら、それでも床上に起きて話し位はした。食物の注意が肝要なので水分のものはなるべく取らさぬやうに傍からも心掛けた。けれども母は病氣のせいで激しく渴（かわ）くので無理にも湯茶を請求した。其爲めに嫂や私は屢々母と争うた。或時餘り母に聞き分けが無かつたので、私は態と言葉を荒らげて言つた。

「こないに止めるのもお母さんの爲を思へばぢやないかな。餘り聞き分けが無さ過ぎる。そないに聞き分けが無いやうなら私が居る甲斐が無いから明日東京に歸る」

さう言つた私の眼にも恐らく涙があつたらうが、それを聞いた母の眼にも涙があつた。母は少し腫れた痛ましい顔を向うに向けてぢつと黙つて一言の返事もしなかつた。さうして決して二度と飲み物の請求をしなかつた。抑へ難き渴をも無理に抑へてゐたものと見えた。

其夜中であつた、ふと話し聲が聞えて眼が覺めた。それは私の寢間から一間隔てた母の病床に當つてゐた。夜中には嫂と私とが代り合つて起きることにしてゐたのであるが、此時は嫂が起きてゐたのであつた。扱て其話を聞くと無事に聞いてゐると母はこんなことを言つた。

「お千代さん、さつき清さんが怒つたが明日日本當に東京に歸つてしまやすまいか」

私ははつと思つて更に耳を引立て、聞いた。重病の母にそんな思ひをさせてゐるといふ事が怖ろしいやうな心持がしつゝ。

其時嫂はあわて、推し止めるやうな調子で言つた。

「なんのまあお姑（か）さん、清さんがそないなことおしるものかなもし、あれはお姑（か）さんの爲めを思つてお言（い）たことぢやがなもし」

嫂の言葉は簡單であつたがそれは非常に力強く夜の静寂を破つて私の鼓膜に響き渡つた。嫂の言葉は震へてゐた。熱があつた。眞心が籠つてゐた。病める姑の子供らしくおど／＼してゐる心を一刻も早く推し鎮めようとするやうに。私が病母を見棄て、歸京するといふやうな不愉快な事

を、急いで夜半の黒板から拭ひ消さうとするやうに。

此時の嫂の言葉程情け深く私の胸に響いたことは無かつた。同じ意味の言葉でもそれが理性的に乾いて發音されたならば私は何とも感じなかつたらう。嫂の言葉には隠すことの出来ない温情が籠つてゐた。それは病母のおどくした心を安んじ得た許りで無く伴り怒らねばならなかつた子供の苦しい心をも慰めいやすに十分であつた。

私はいつ迄も母を介抱してゐることが出来なかつた。母の病の小康を得た時に東京に歸つてホトトギスの發行に志した。第二巻の第二號即ち東京で出すやうになつて第二冊目を編輯してゐる時に一封の飛電が私を驚かした。それは「ハハキトクカヘルニオヨバヌ」といふ電報であつた。私は母の死水を取ることが出来なかつた。母の最後の介抱は嫂の手によつてなされた。

ホトトギスを出すやうになつてから、私は金銭上更に兄の厄介になることが多かつた。兄は大概の場合快く承諾してくれた。たとひ出来ない場合でもそれを止めといふ命令的のことは言はなかつた。どうか他に方法は無いのだらうかと相談するやうに言つた。凡てそれは私の問題ではなくて兄自身の問題として考へてゐるやうに見えた。斯ういふ點に於て私は此世の中に兄程私に親切な人は無かつたことを、此年齢になつて痛切に感ずる。

さういふ場合嫂は恐らく兄の相談には與らなかつたであらう。たとひ多少の話はあつたにしても、嫂はそれに就いて意見を陳べるやうなことは恐らくしなかつたであらう。否、嫂には意見があつたにしても、兄はそれを聞かうとはしなかつたらう。たとひ聞いたにしてもそれは一婦女子の言として、兄弟の間の情誼に影響を及ぼすべき謂なきものとして重きを置かなかつたであらう。嫂がさういふ場合に私に對して不愉快な顔を見せたことは殆ど記憶にない。

東京で下宿を營んでゐた季兄の死は、私等骨肉のものゝ中で最も悲惨なことであつた。正直で謙讓で努力的でそれで常に失敗して、四十二歳で一生華々しい生活をしたこと無しに死んだ季兄の事を思ふと、私等兄弟の心は甚だしく痛んだ。さうして取り敢へず其四人の遺兒を如何にするかが問題になつた。其中で下の二女兒は兄が引取ることになつた。子の無い兄夫婦は始めて子を持つた心持で幼い二人の姪を育てねばならなくなつた。先づ三歳の妹の方が引取られ、ついで七歳の姉の方も引取られた。

是より前嘗て兄夫婦が自分の子供と思つて心を掛けてゐた私が、遠く東京に居をトして家庭を作つた、それは凡て二人の意思通りに行かなかつた、といふことがどれだけ其の心を傷けたか。「男の子はとも思ふ通りにならぬ」

本當の子供の無い二人の心には必ず斯ういふ考が浮んだに違ひ無い。殊に嫂の心には他郷に飛

び出す男の子はいくら世話をした處でとても自分の老後の頼みにはならぬ。幸だから一奮發して、其止むを得ず引受けねばならぬ事になつた二人の女の兒の世話をしてみよう、といふ強い考が浮んだことは争はれない。淋しい夫婦暮しの家庭に俄に二人の子供が出来たことは重苦しい責任ではあつたが、又賑かな張合ひのある生活であらねばならなかつた。

姉の方の姪を松山に連れて歸つたのは嫂と私との二人であつた。嫂が京都が始めてだといふので私は京都で一泊して嫂を東山見物に引張り廻した。七歳になる姪が清水の坂で歩けないといふので私が負ふといふのを、

「負うたらそりや清さん重たうてたまらん。さあえゝ子ぢやお歩き。お歩きたら宿屋へ歸つてから何かえゝ事があるぞな。あれ御覽、向から恐ろしい人が来る。そないな我儘をお言るとあの人が連れといきるぞな」

嫂はすかしたりおどしたりして姪を歩かしたことを記憶してゐる。さうして其宿屋に泊つた翌朝私はふと目を覺まして見ると、其姪が苦しがつて泣いてゐる。それを嫂が、

「どうおしたんぞ〜」と心配さうに聞いてゐた。姪は唯苦しがつて泣くばかりで少しも事情が判らなかつた。嫂はふと氣がついたやうに、

「お前ゆふべ草臥れて直ぐ寝とおしまひたけれ御飯をお食べなんだ。それでひもじいのぢやあろ

がな」

嫂は枕許に残つてゐた膳部を引寄せて泣き苦しがる姪に、まだ明け切らぬ部屋の中で、ラムプの光で飯を食はした。今迄苦しがつてゐた姪は冷めたい汁を掛けた冷めたい飯を三杯許り食つて忽ちいゝ機嫌になつた。

「まあよかつた〜。連れて來た早々から、此旅先で病氣にでもなられたらと思つて、伯母さんはびつくりしたがな」

少し顔の筋肉を震はしながら嫂は笑つた。

其日はもう外の見物をするよりも一日も早く歸る方が安心だといふ嫂の意見に従つて早速歸國することにした。

これは些細な一事實であるが、斯ういふ事を振出しにして、二人の姪の世話は大変な骨折であらねばならなかつた。

或年私が歸省して見ると二人の姪はもう大分大きくなつてゐた。姉の姪の方は學校に通つて何年生かになつてゐた。臺所で私の爲めに嫂が用意してくれてゐる晚餐の皿を二人は私の許に運んでくれた。

「あたしが持つて行く」

「あたしが持つて行く」

一つの皿を二人は争うたりした。

話が季兄の事に及ぶと兄の眼にはいつも涙があつた。さうして二人の姪を顧みて斯ういふのが常であつた。

「まあ治(季兄)の爲めぢやと思つて世話しとるのよ。お千代には氣の毒ぢやけれども、だん／＼大きくなりやあまた手助けにもならないの」

季兄の爲めに遺孤の世話をしてをるといふ満足の上に、二人の姪のおひ／＼と育ち行くといふ満足も斯ういふ時の兄の顔色のうちに讀むことが出来た。嫂もまた自分の骨折の徒らでないのを必ず張合のあることに考へたに違ひ無い。

かゝる年月が過ぎ去つて、妹の方も小學校に通ふやうになり、やがて姉の方は小學校を卒業した。さうして東京に残つて季兄の遺業を手一つで經營してゐる季嫂の努力は空しくなく相當の成績を收めつゝあつたので、其姉の子の方だけ生みの親の許に引き取られることになつた。

あとに残つた幼い姪の方はまだ物心の判らぬ時に引取られたので兄夫婦を生みの親と考へてゐた。兄夫婦は又それをさう考へさすことの上に淋しい満足があつた。

「鶴はどうやら本當の親のやうに思うとるらしいかい。しかし近所の人が話すから自然判りはせ

うけれども」

或時兄は私に斯う話して私の顔から目を外らして笑つた。嫂はそれを話し合つてゐる私達の方を向かすに淋しくおし黙つて仕事をしてゐた。

果して兄の豫言通り、生みの親が外にあることはすぐ幼い心の上に烙印されてしまつたけれども、兄夫婦と此姪との間には隔ての無い親しみがいつ迄も保たれてをつた。

年月はまた流るゝ如く過ぎ去つて此姪もやがて小學校を卒業してしまつた。さうして松山の女學校に通ふやうになつた。私が子供の時分嘗てもたれた机に靠れて、つゝましやかに勉強してゐる姪の姿を私は歸省する度に家の一隅に見出した。

此姪のほかには嫂の里方や其兄弟の家から一二人宛の娘が立ち替り入り替り來てゐることを、私は又其後歸省の度に見出した。だん／＼年取つて行く子の無い夫婦の間には、人生の寂寞がひしひしと押寄せて來るやうに思はれる場合も少くはなかつたらう。姪の話によると兎角夫婦の間の和合を缺くやうなことも珍らしくないとのことであつた。親戚の若い娘達の世話は、頼まれて辭し切れないといふ理由もあつたであらうが、また其の寂寞に打ち勝つ爲め止むを得ない必要に迫られたものであつたかも知れぬ。

嗣子としては私の次男が入籍したけれども、此姪もやはり養女として一旦兄の家に籍を入れ、

それから他に嫁がすことになつた。

「鶴子（養女）に養子をする方がお千代の爲めにえゝかとも思ふが、今頃の養子といふものは餘り頼みにもならんやうに思うて決定しかねてをるのぢやが……」と兄は或時私に話した。

「養子はお止め」と私は一も二もなく不賛成を唱へた。

養子の話は其後二度と聞かなかつた。さうして松山を遠く離れてゐない土地に鶴子を縁づけることになつた時、兄は表立つて書面で相談してよこした。私は一に兄上のお心次第、私には何の意見も無いと返事をした。

松山近くの人に縁づけるといふことはやはり何かにつけて鶴子を便りにしようといふ二人の考に基いたものであつたらう。

私の事業などについては嫂の意見は恐らく顧みなかつた兄も、鶴子の事については相當に嫂の言葉に耳を傾けたことゝ考へる。三つの年から十八九歳迄自分の子同様に育て上げたのも、自分の死後子の無い老妻の爲めといふ考が兄には十分にあつた。自然嫂の爲めにどう取計らつたらいいか、嫂の考はどうか、といふことは絶えず念頭にあつたであらう。旨く行けば養子に越したことは無い、養子が駄目とすればせめて近くに住居して、事ある毎に力になる所へ遣り度い、といふ嫂の意見が餘程力強く兄の心を支配したであらう。

扱て縁づけて見ると其せめてもの希望すら豫期した程には達せられさうもなかつた。斯ういふ時に鶴子がゐたらばと思つても、其都度呼び迎へるわけには行かなかつた。斯うもしてくれさうなもの、あゝもしてくれさうなものと思つても、必ずしもさういふ風に運ばなかつた。十五年、六年もの養育の結果はやはり大きな失望に終る外はなかつた。老夫婦の淋しい秋の夜の物語は、必ず是等の愚痴を繰り返すのに終つたことであらう。

前にも言つたやうに自分に子供の無いといふ淋しさは兄夫婦の生涯を一貫した。眞實の子が獲られないとすればせめて子として育ていつくしんだものに頼らねばならぬ。斯の如くして先づ私に失望し、次に鶴子に失望して見ると最早老後に何を頼みとすべきか。抑へ難き寂寞の感が心底から湧き立つ事をどうすることも出来なかつた。

鶴子のまだ縁づかぬ以前ですらも此老夫婦の間に屢々感情の衝突を起して、嘗て一度兄が瘠せた腕を揮つて嫂を打つたことがあり、嫂はそのまゝ家を出て二三日其縁家に行つたことがあつたといふことさへ聞いた。何が原因でそんな争が起つたのか、それは詳にすることが出来なかつたが、要するに其日々々の生活其ものに多くの興味を見出し得なかつたといふことが主な原因であらねばならぬ。年とつた子の無い夫婦が互に其感情に不満足を感じて、些細なことをひがんだり、怒つたり、怨んだり、争つたりすることは又人生の悲惨事であらねばならぬ。

鶴子の家に在つた間ですらさうであつたとすれば、鶴子が縁ついた後の家庭の冷めたさは想像に餘りある。嫂の縁家の子女が二人宛同居して居つたにしても、それは唯家庭に人が増したといふばかりで心の寂寞をどうすることも出来なかつた。偶々私が歸省することでもあると、兄夫婦は非常に喜んで迎へた。ガラスの燭徳利に燭が出来てそれは私の膳の上に置かれる、兄は又二三杯を盃に受ける、斯くて一夜は燈下に楽しく語り明かされるのであつた。けれども其翌日から種々の事情に餘儀なくされて、ちつと兄の家に靜かに留つてゐる私を見出し得ない事は、兄に取つて餘程不満足なことであるやうに見えた。不愉快さうな兄の顔の傍に同じく物足りないらしい嫂の顔があつた。以前は郷人に迎へられて私が會合に出席することは、兄の喜びであり満足であるやうに見えた。

「まあ清もあれ位になりやあえゝわい」と心の中で繰り返してゐるやうに見えた。それが此頃になると私が如何に人から歓迎される催しであつても、兄といふものから私の離れる事が不満足のやうに見えた。此不満足は同じく嫂の頭にもあつた。斯くして私が老夫婦の期待に負いてしみじみと其膝下に在ることもせず慌だしく歸京した時などは、寂寞の感が一層深く二人の心を支配して、やがて又二人の間の感情が離れ々々になるやうな傾が自からあつた。

兄の死がそんなに早く來ようとは私の豫期しないことであつた。生憎鶴子夫婦も東京に移住して居る時に突如として兄の病狀が其友人から報ぜられた。私が一番に歸り鶴子もまた次いで歸つた。嘗て子の如く思つて撫育した二人は兎も角其の病床に侍して看護の任に當つた。けれども其看護の中堅は固より嫂であつた。大姑を見送り舅姑を見送つた嫂は、又夫をも見送るべく出来るだけの力を盡した。私が歸る迄は唯醫師の言に信賴するばかりで——信賴するといふよりは甲といへばさうかしら、乙といへばまあさうなのだらうか、と唯動かされるばかりで——其日を暮してゐたのであつたが、私が歸つてからいくらか落着いたものゝやうに見えた。而も少しも取り亂した風が無く、多くのことに失望して人世に於て頼むところのものは唯自分の力あるのみと考へたものゝやうに、其私の言ですら彼女の心に合點の行かぬことは必ずしも耳を傾けなかつた。唯兄が澁の如きものを金盞に吐いた時に嫂は次の間に來て投げ出すやうに私に言つた。

「清さん、もういかなぞな。あんなものをお吐きるやうぢやもういかな」

それが入院後化膿性肋膜炎であると判つて、醫師からは尙ほ一縷の望があると云はれた時にも嫂は、

「さうかやなあ。それでもあんなものをお吐きるやうぢやもう見込が無い」と其醫師の氣休めの言葉に迷はされようとはしなかつた。

少し小康が見えた時に嫂は一寸家に歸つた。それは入院後始めて家に歸つたのであつたが、歸つて疊の上に入るや上らぬに容態急變の警報が向ひの家の電話によつて傳へられた。嫂は其リウマチで惱んでゐる足首の激しい痛みを忘れて宙を飛ぶやうに病院にかけつけた。それは患部の毒素が腦を冒して呼吸困難を訴へつゝあるのであつた。嫂は其一寸家に歸つた心のたるみを悔ゆるやうに兄の手を取つて、

「一寸橙襖切れを見て來うと思つて歸つた間であつた。難儀なかなもし」と悲痛な聲で聞いた。

「あゝ難儀であつた」と兄は今迄の苦しさを過ぎ去つたことのやうに言つたが、それは又勢を増して押し寄せて來た。起き上らうともがいたがそれも出来なかつた。兩肩を聳やかして齒をくひしばつた。それは益々呼吸困難に陥つて絶體絶命の苦悶を訴へるのであつた。此時嫂は、

「難儀なかなもし」と病者と同じやうな苦悶の聲をふりしほつた。中兄は——中兄は其の前夜病床に到着した。——傍から之を制して、死ぬる時の病人は決して傍で見えてゐる程苦痛を感じてゐるものではないさうな、餘り廻りで騒がぬやうにせなければいかぬ、と制した。

兄が遂に其苦しい呼吸を引き取つた時に嫂は聲を放つて泣いた。遺骸を家に引取つて後の彼女は其髮を切つた。

子の無い老夫婦の生活はこゝに幕を閉ぢた。あとには嫂が寡婦として残つた。

入棺をすませて後ち中兄と私は相談して、此寡婦を一人で松山に置くことは何かにつけて不でもあり不安心でもあるから、此混雑序でに家を疊んで東京に引取ることしよう一決した。私達はそれ〴〵多忙の體であるので長い滞在をも許さなかつたので、通夜のしめやかな晩この意見を嫂に話した。

「さうかな、そないに早う東京へ行かんらんのかな。嫂^{おと}さんはせめて一年だけでも兄さんのお墓参りをしてからにしてもらひ度い」

嫂は極めて嚴肅な態度で斯う答へた。

其嫂の一言で家を疊んで上京するといふことは中止になつた。ともかく一年間亡き夫の墓を守るといふ嫂の意思を尊重するより外に途は無かつた。

私達兄弟は兄の遺産を處分せねばならなかつた。其の三分の二は友次郎に襲はせ、其の三分の一は嫂の自由に使用すべきものとして分與するといふ意見を私は中兄に提出した。中兄は同意した。

嫂は豫て兄が私の歸省の度に私に示してゐた用筆筒の抽匣を私達の前に持ち來した。嫂は自分の算筆に暗いといふことばかりでなく、遺産處分の権利は毫末も自分に無いものと考へてゐるか

の如き態度で帳簿全部を私達の前に差出した。私は中兄と共に一應しらべて見た。病氣にかゝつた前日迄一絲紊れぬ收支が明細に記録してあつた。

是より前嫂の縁家になる人の爲に兄が損失を受けたといふことは、兄に取つても非常な打撃であつたけれども、殊に嫂には堪へ難い苦痛であつたに違ひ無い。若い時から貧世帯の主としてつくゞ金銭の價値を認めた兄は、衣食を節しても貯金を増すといふことが唯一の慰樂であり又事業でもあつた。その半ば位を人の爲に失つてしまつたといふことは、其の生命の半ばを奪はれたのも同じことであつた。其の人が嫂の縁家であるといふことの爲に、自然兄の愚痴が嫂に向き、嫂の不平も亦兄に向ふことは免れ難いことで、鶴子が私に訴へた子なき老夫婦の間の不和といふのも、これが一つの原因を爲してゐたかも知れなかつた。

其大打撃を受けてから後ち、兄の節儉は一層度を強め、嫂を帯同して私達に逢ふ爲に東京に來た時でも、物見遊山に金を使ふといふやうなことは絶対にしなかつた。嫂は其生活の淋しさ冷たさを暗に私に訴へたこともあつた。

併し其の兄の節儉の結果は、其死後の帳簿に明細に記録されてゐた。其大損失を蒙る前の金額に殆ど等しい額、或はそれよりも稍、多いかと思はれる額が遺産として残されてゐたのであつた。私は中兄と相談して其約三分の二を嗣子としての友次郎に、約三分の一を嫂に、若干を近親一

同に分與することにした。それを決定する前嫂に相談した時に嫂は、

「嫂さんはちつとも意見は無いから、清さんのお考へ通り」と答へた。

私達兄弟は葬儀を終へてから間も無く東京に歸ることにした。家に傳はつてゐるといふやうな古い道具書籍類などは東京の方に送ることにして、造荷りは兄の友人に依頼した。具足や、槍長刀の類は久松家の倉に預けたまゝにした。

私達の歸東と共に若干の道具を抜き去られた家庭は餘程淋しいものであつたらう。稍、忍ばぬやうな心持もせぬではなかつたが、多忙な私等兄弟が一緒に歸國するといふことは容易なことでなく、どうせ一年後に東京に引移るものとすれば、此際に片づけて置くのが便宜といふところから嫂とも相談の上決行したのであつた。

大風の吹き去つたあとのやうな家庭には、鶴子と嫂と他に嫂の親戚の娘一人とが残つた。嫂は痛むリウマチの足を引きすつて毎日のやうに墓参しつゝあるといふ消息を其後鶴子から受取つた。淋しい單調な月日が荒廢したやうな家庭に續いた。

鶴子も際限も無く嫂の許に在るわけには行かなかつた。三十五日か四十九日かの法要をすませ後ちに歸京することになつた。歸京して後ちの鶴子の口から私は斯ういふ言葉を聞いた。

「お母さん（嫂）は斯んなことをお言ふのよ。これからのお母さんはもう懲一方ぞなちやの」

さう言つて鶴子は淋しさうに笑つた。それを聞いた私も笑つたが、其笑は中途で消えてしまつた。嫂の心を辿つて行つて見ると、五十九歳で寡婦になつて、實子があるでもなく、道樂があるでもなく、事業があるでもなく、理想があるでもなく、宗教があるでもなく、つまり取りとめた何の希望も無い身であつて、扱て何者をかと思し廻つて見た時に萬人に共通な慾といふものに衝き當つて、

「さうだ、これだ。これからの生涯は慾一方にかゝつて見よう」と考へたことは、まことにはかない傷ましいことと言はねばならぬ。

「まあお母さんが、これから慾にかゝつてどうおしる積りであらう」

これが鶴子の考であらねばならぬ。それはまことに鶴子の考通りである。五十九歳の寡婦がこれから慾にかゝつて何になるものか。けれども嫂にしてはせめて慾といふ希望を見出して、それに繋つて餘生を送らうかと考へついたのである。

「それもえゝだらう」と暫くしてから私は鶴子に答へた。

鶴子は又、

「紋附の羽織を一枚清さんに拵へてもらひ度い、とお母さんが言うてみましたよ」と言つた。私はそれ等の費用を一々送金するのが面倒だからと思つて、或纏まつた金は定期預金にさせ、別に

若干の金を當座預けにさせて置いたのであるが、聞く處によると嫂は其當座預けにも手をつけぬことにしてゐるとの事であつた。一枚の羽織を染めさせて送つた時に嫂は、

「思つたのより上等で難有う」と言つて來た。さういふ註文が引き續いて二三度來た。

翌年即ち大正六年の一周忌には私と鶴子と洗とが歸つた。嫂は痛む手足を働かせて客設けをした。客は主として兄の謠仲間であつて、佛前で獨吟を手向けてくれる人もあつた。田舎の人は辭令が慇懃で私は一々それに應酬するのに大分骨が折れた。「談笑常の如くなるべし」といふ子規居士のいつた通り私は、此時も寧ろ反抗的に其態度をとつた。それが少々嫂の感情を損ねたかも知れなかつた。客が散じて後ち、

「去年は丁度今頃兄さんが……」と嫂は興奮した調子で、稍々ヒステリカルに獨語しかけた。

「お母さんお止めなさいよ……」と鶴子は慌て、嫂を制した。私は黙つて嫂の顔を見詰めてゐたが、彼女は口をつぐんで其以上を續けなかつた。さうして氣を換へたやうに、

「清さん、お勞れつろ、御苦勞様であつた。お休みよ」とやさしく言つた。私達は夫々寢床をのべて寢た。祭壇の佛燈は淋しく兄の寫眞を照らしてゐた。

大正七年の春嫂は一度上京した。丁度花の盛りで、恰も私達が鳴雪翁の古稀祝賀の能を催してゐた日であつた。此能を見たり、諸處の花を見たりする位のことにはあつたらうが、中兄も私も多

忙な日を送つてゐたのでしみるゝと嫂を慰藉するいとまを見出しかねた事を唯記憶してゐる。或は嫂が上京して間も無く私は旅に立つたかとも思ふ。

同じ年の五月頃に私は或用事を持つて友人と共に歸省した。夜着いたので私は友人と共に其夜は道後の鮎屋に一泊した。さうして翌朝嫂の家を訪うた。流し許で茶碗を洗ひつゝあつた傍にだしぬけに突立つた私を見出した時に、嫂はいきなり不平らしい聲を漏らした。

「まあ清さん、通知もせず……」

さうして二三言交へた後に昨日鮎屋に一泊したことを話した時、嫂の顔は再び曇つた。「宿屋にな？」

これが兄の生前であつたらとても許さるべきことでないことは知つてをるのであるが、同行した友人に頼まれた或仕事を果す爲には、嫂の家よりは宿屋を便宜とする爲に、私はやはり引續いて宿屋に泊ることを嫂に話した。嫂は不本意ながらもいつ迄も愚痴つぽくは言はなかつた。其後二三日して鮎をつけたからと言つて、私と二人の友人とを午飯に呼んだりした。

私の仕事といふのは半切何枚かを揮毫せねばならぬのであつた。酒を飲まねば揮毫の出来ぬ私には、それは相當に苦痛な仕事であつた。私は餘り屢々嫂を訪ねることは出来なかつた。嫂に道後入浴の序に一度鮎屋に立よつて晝飯でも一緒に食つて行かぬかといふことを勧めたが、嫂は來

なかつた。或時入浴に來たので、其歸りに立よることゝ待つてゐたのに立寄らなかつた。さうして私が顔に藥を塗つてゐたのを或人が見て嫂に話した時、嫂は極めて冷かに、

「二階から落ちでもしてお打ちたのかな」と言つたといふことを又或人は私に傳へた。嫂の家に泊らずに宿屋に泊つてゐるといふことが、如何に嫂の感情を害してゐるかといふことが此皮肉な一言で盡されてゐることを考へて、私は覺えず失笑した。私は顔に土肥博士から貰つた藥を塗つてゐたのであつた。

さき一周忌に歸つた時にも、上京した時にも、亦此の歸省の時にも嫂の方からは一言も松山を去るといふことを口にしなかつた。そこで私の方から、

「もうどうぞな、そろ／＼東京においでよは」と話の序に聞いて見た。

「まあもうすこしこちらに居ろわい。もうすこしお墓参りをして」と嫂は答へた。私は其以上強ひることをしなかつた。

嫂のリウマチは相變らずのやうであつた。上京して鎌倉に來た時に、島村氏が惠那からラヂウムを取り寄せて風呂を立て其痼疾のリウマチを療治してゐられる、其風呂に入浴することを島村氏もすゝめられたので、嫂に話したのであつたが、嫂は窮屈がつて行かうと言はなかつた。

「此間松山で大變よう利くお灸があるといふので、それを据ゑたが大分えゝやうだ」と其時は其

お灸を信用するやうに言つてゐた。

「島村さんはあらゆることをして御覽になつてどれも効が無かつたのに、ラヂウムははじめて痛みをとめたと言つてをられる。ちやんとさういふ明かな證據があるのだから、試に一度這入つて御覽、それでえゝとなつたら惠那へ一月許り逗留して見てもえゝぢやないかな」と私は切に勧めて見たが、其ラヂウムといふ名が第一嫂には餘り力強く響かなかつた。それよりも松山のお灸の方により多く心が傾いてゐた。ところが今度歸つて見ると其お灸もやはり格別の効果は擧らぬらしかつた。

「手の方は大分えゝのぢやがな。どうも足首が痛うて」と嫂は骨が瘻のやうに腫れてゐる手首をさすつて見せた。染みの出来てゐる皮膚は其患部だけが格別に光つてゐるやうに見えた。

大正八年の春も亦上京した。丁度友次郎は小學校を卒業して東京の中學校に入學した。此時は嫂の心も大分動いてゐたと見えて、ふとした話の序に又例の上京一件が話題になつた。其時嫂は案外無造作に、

「それでは來ると極めうかやな」と言つた。傍に在つた中兄も私も、

「それではさうお極め」と賛成した。

友次郎はホトトギス發行所に置いて通學させつゝあつたのであるが、愈々嫂が上京するときま

れば別に家を見つけて、其處に嫂と同居さすことに私は決心した。

「何分手足が不自由でそれに困るけれど、水さへ汲んでくれる人があれば、友さんの世話位出来ぬことは無いわいな」と嫂は多少氣乗りがしてゐるやうに言つた。さうして一度松山に歸つた。

丁度中兄夫婦が松山に歸省する用事があつたので、荷物の片づけ等は一切中兄を勞した。

借家の不自由な時分であつたので色々人に頼んだ末、大久保百人町に普請半ばの家を契約して、其處を嫂と友次郎との新居とした。

八月の夏休みに嫂は漸く上京した。家を疊んで後ちも暫く親戚の家に逗留したり、道後に入浴したりして相當に日數を費して後ち上京したのであつた。

大久保の新居は雜普請ではあつたけれども、新築だといふことが嫂の氣に入つたらしかつた。それに松山に比べれば夏の暑さの凌ぎやすいといふこともいくらか氣に入つたやうであつた。松山から嫂の姪に當る十八歳の少女を連れて來たので、それが學校に通ふひま／＼嫂の手助けをした。夏休みは鎌倉の私の家で過ごした友次郎も九月の學業開始から愈々嫂の許に同居した。曾て家に傳はつてゐたものとして私の家に引取つて置いたものも皆一纏めに此新居に移した。即ち兄生存中の家具は概ね此新居に移つたことになつた。具足も槍も又床の間や長押に頑張つてゐた。池内宗家の嗣子としての友次郎と、其養母たる嫂とは其具足や槍の下に始めて生活を共にするや

うになつたのである。

嫂は、

「一度は斯ういふ新らしい家に住んで見度いと思つとつたのよ」と建てつけの悪い障子の、それでも新らしいのを見やり乍ら言つた。成程考へて見るといつも古家にばかり住んでゐて、たとひ粗末な普請でも新らしい家といふ事が珍らしくも好ましくもあるのだなと思はれた。

嫂は手足のリウマチが悪い爲め水汲みに困ると言つて、自分の姪の十八になるものを一人連れて來た。其姪といふのは音楽學校に這入るといふてゐた。

「高い、清さん、あの流しがいくらしたがな」と物價の高い事が嫂を驚かした。彼女は一月の拂ひを計算して、それは姪に書かして、私の行つた時に見せるか、若しくは其姪に持たせて牛込の私の家によこした。

嘗て私の家に持歸つて居つた道具をも全部嫂の家に返したので、嫂は凡てこれをいたいいリウマチの手でそれ／＼戸棚や押入れに片づけた。さうして佛壇がこはれたのを氣にしてゐたが、それはいつの間にか大工に修覆させてちやんと燈明をさゝげ朝茶を供してゐた。それは私の子供の時分から見なれてゐた毎日の行事であつたが、こゝでも相變らず行はれることになつた。友次郎は

土曜日の午後から日曜にかけて鎌倉の方へ歸る事が多かつた。これは彼の姉妹達が彼の歸るのを待設けてゐた爲であつた。

行つて見る度に嫂は獨りぼつ然としてゐた。姪も此頃は音楽學校の乙科とかへ入學して通學してゐるのである。嫂は私の行くのを喜び迎へた。私はいつも忙がしいのでそ／＼に歸つた。嫂はもの足らぬ容子で私を見送つた。

日曜になると此姪を連れて親戚などを訪づれた。留守は戸締りをして向ひの家へ斷つて行くのであつた。

ところが此姪が家の都合で歸郷することになつたので、嫂は唯友次郎と二人きりになつた。二度水を汲んで見たが、重いポンプをギ／＼やることは手のふし／＼がいたんで來て堪へられぬといふことであつた。

私は一時急場を凌ぐ爲に發行所の事務員を嫂の家に同宿させた。さうして朝起きて壺に一杯の水を汲んで置くことを彼に命じた。

これできあどうか斯うか其日が過ぎして行かれた。或時私が訪問すると嫂は、「朝起きると水を汲んでおくれるが、もそれぎりぢや。其水が無うなつても汲まうともおしん」と言つた。

或日曜日嫂は友次郎を連れて浅草へ行かうと思ひ立つた。友次郎は浅草をよく知らぬといふので、大塚の親戚の家へ行つて其處の子供を嚮導者に頼んで浅草へ行つた。何でも連鎖劇か何かを見て歸つたといふ事であつた。

後になつて考へると友次郎が日曜毎に鎌倉に歸るといふ事は、嫂の氣に入らなかつたやうだ。彼女は日曜は當てにしてゐた。

嘗て仲兄に伴れられて一度帝劇を見物したことがあつた。それは大變嫂の喜びであつた。

「淋しい時に火鉢の前でちつと考へると其の舞臺が目の前に現はれて来る。それで暫く楽しむよ」と友次郎に話したさうである。これは後に友次郎から聞いた話である。

之を思ふと嫂は寂寞に堪へなかつたやうだ。彼女は友次郎が新聞を讀んで聞かすのを楽しみにしてゐた。さうして寝る前に假名のふつてある「櫻川」の謠本を廣げて小聲で謠ふのが二階に寝てゐる友次郎の耳に響いた。

嫂は東京へ來れば自由に芝居や能が見物が出来ると思つてゐたのであらう。さうして實際それが出来なかつた。

私達は嫂の生涯はまだ長いことと思つてゐた。私達はこれを慰藉することを考へぬではなかつた。が、それ程急いでしなくつてもまだ前途は長いことと思つてゐた。

兄の三年忌を嫂の家で修したのは嫂のせめての慰藉であつた。兄の寫眞が取出されて祭られ、床には花が生けてあつた。一族が皆集つて謠を謠つたりした。

「嫂さんもお坐りんか」と座席に着くことをすゝめたが、嫂は終ひ際迄愉快さうに立働いてゐた。嫂は聲高く笑つたりした。

會て牛込の宅で親類會をした。それは兄もまだ生存してゐる時であつた。若いものゝふざけるのが面白くつて兄夫婦は腹を抱へて笑つた。それを嫂はよく思ひ出した。

「またあゝいふ親類會があるとえゝのに」とよく友次郎に話した。

新年は鎌倉の家へ來た。さうして松山から來る筈になつてゐる緋の燕の事を氣にしてゐたが、丁度嫂の來てゐる時に着いた。嫂は寒いのもかまはずそれを漬けるべく斡旋した。さうして漬け終ると東京へ歸つた。歸りに鶴子の家へ寄つて一泊した。按摩を取つて揉ませたりした其時鶴子に、

「帝劇をお奢りや」と言つた。鶴子は嫂の死後其を果さなかつた事を後悔してゐた。

或日私は新橋のステーションを裏口の方へ降りた。丁度其裏には嫂が突立つてゐた。それは非常に風の吹く日で嫂の顔には其切り下げにした髪が亂れかゝつてゐた。其顔色も風に吹かれてよくなかつた。嫂はぼんやりして氣附かずにあるのを、私が、

「嫂さん」と呼ぶので漸く氣が附いた。さうしていきなり私の顔を見詰めて疊みかけて言つた。

「清さん、おいくさん（季嫂）はありやいかんがな。あの儘にしといちやどもならん、看護婦をおつけるやうに言うといた。今嫂さんの歸る時は少し痛みが薄らいだが、そりや烈しく痛んでな」私は季嫂の病氣の事は始めて此時聞いたのであつた。さうして其嫂の話も風に吹かれて辛うじて聞き取れた。嫂は切符を切つて貰つて中へ這入り、私は出て來る人にへだてられて、軽く禮を交し別れた。さうしてこれが生前嫂に逢ふ最後であつた。

嫂は頻りに貨殖の事を心に掛けてゐたやうであつた。私には少しも話さなかつたので知らなかつたが、季嫂に用立てゝある金——それは嫂の所有になつてゐた——を若干受取つてそれを其頃株式に手を出して人に用立てた。其人は若干の利益を得させたので、嫂は更に纏まつた金を用立てた。これは死歿前二三日の事であつた。折節株式の暴落でそれは煙と消えてしまつた。

大正九年三月廿四日朝、嫂は雪隠で卒倒して人事不省になつた。私は知らせに驚いて行つた。さうして少しも覺醒せず翌日の午前一時頃に瞑目した。病名は腦溢血であつた。

其臨終の枕許には友次郎も居た。鶴子も龜子も居た。其他池内家の眷族は皆集つた。唯石婦としての彼女は其周圍に一人の骨肉も持たないでつめたい息を引き取つた。

大久保の家は僅かに半年餘りの住居であつた。私は之を疊んで再び友次郎を牛込の家へ引きと

つた。

嫂が怠らず遣つてゐた朝茶を佛前に供する事は、今は私の二女立子が遣つてゐる。（完）

（自 大正九年九月 至 同 十年二月）

16269

本定
虛子全集
第八卷

昭和廿三年九月十五月初版印刷
昭和廿三年九月二十日初版發行

定價參百圓

著者 高濱 虛子

發行者 矢部 良策

大阪市北區樋上町四五番地

印刷者 井下 精一郎

大阪市西淀川區柏里町三丁目

發行所 株式會社 創元社

大阪市北區樋上町四五番地

振替口座大阪五七〇九九番

東京都中央區日本橋小舟町二

振替口座東京一五六五番

終